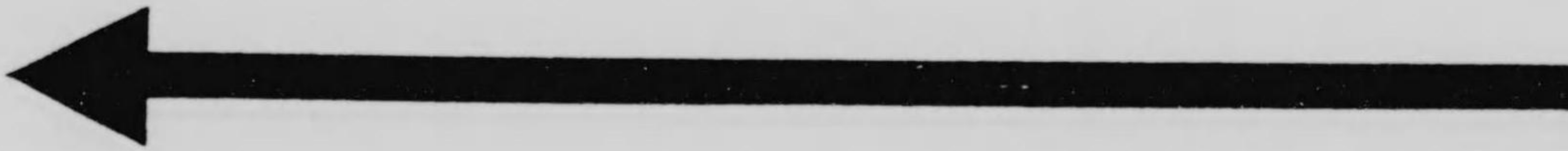


394

271



始



KZFF-89

394-291

近月名所圖會

=

大正
11 9.19
内交

江戸名所圖會 二目錄

天璣之部 目錄……………九一四五二

卷之三 天璣之部……………

第一〔自一九頁至三八頁〕 麴町日吉山王神社に筆を起し、麻布、芝白金、二本榎を経て郡部に出で目黒、碑文谷、奥澤の諸村を記し、細井廣澤の墓に至る。

第二〔自三九頁至六〇頁〕 赤坂御門に始まり、赤坂の一部及び青山を經、大山街道に沿へる澁谷、世田ヶ谷、北見、の諸村を記して多摩河、丸子渡に終る。

第三〔自六一頁至六二頁〕 四谷、新宿及び千駄ヶ谷、代々木の一部を記し、街道筋に沿へる高井戸、深大寺、國分寺、戀ヶ窪の諸村より府中町に至り、更に多摩川を越えて高幡、百草、小山田關等都築ヶ岡の名所古跡を尋ねて管村の壽福寺に終る。

天權之部 目録……………四五三
卷之四 天權之部……………四七—六五二

- 第一〔自四五七頁至五一六頁〕市ヶ谷八幡宮に始り、其附近より大久保を經、淀橋、角筈、中野、堀ノ内、幡ヶ谷、井ノ頭の諸村を記し、金井〔コガ〕橋に至る。
- 第二〔自五一七頁至五八九頁〕牛込築土明神、神樂坂、赤城神社の附近を記し、早稲田、戸塚、高田等を経て落合村に至る。
- 第三〔自五九〇頁至六一〇頁〕小石川牛天神より、諏訪町、小日向水道町を過ぎ關口附近に至る。
- 第四〔自六一二頁至六五二頁〕小石川大塚より、護國寺、雜司ヶ谷に至り、鬼子母神に終る。

(天權之部未完)

江戸名所圖會 卷之三

天璣之部 目録

〔原本七より十まで四冊〕

- | | | |
|---|--|---------------------------------|
| 永田馬場日吉山王神社
ながたはばひ よしきんわうじんじや | 成田下總守長泰舊地
なりたしもふのかみながやすのきやうち | 第六天祠
だいろくてん |
| 平川天満宮
ひらかはてんまんぐう | 貝塚
かひづか | 寅薬師如來
とらやくしにょらい |
| 千手觀世音 秦川勝守本尊
せんじゆくわんぜんおん 秦川勝守本尊 | 清水坂 清水谷 柳の井 富士見坂
しみづか 清水谷 柳の井 富士見坂 | 櫻田
さくらだ |
| 櫻ヶ井 若葉の井
さくらいゑ 若葉の井 | 霞ヶ關舊跡
かすみせき きやうせき | 靈南坂 潮見坂 江戸見坂
れいなんざか 潮見坂 江戸見坂 |
| 麻布善福寺 藏王權現 杖銀杏 鹿島清水 寺寶 了海上人誕生圖
あさふぜんぷくじ 藏王權現 杖銀杏 鹿島清水 寺寶 了海上人誕生圖 | 溜池 白山祠
たのいけ 白山祠 | 氷川明神社
ひかはみやうじんじや |
| 七佛藥師堂
しちぶつやくしだう | 一本松
いっほんまつ | 子安薬師如來
こやすやくしにょらい |
| 祥雲禪寺
しやううんぜんじ | 霞山稻荷祠
かすみざんいなり | 廣尾原
ひろをのぼら |
| 廣尾水車
ひろをみづぐるま | 廣尾毘沙門堂 光孝天皇御陵 石燈籠
ひろをびしやもんだう 光孝天皇御陵 石燈籠 | 氷川明神社 雷電宮
ひかはみやうじんじや らいでんのみや |
| | 土筆原 豊澤の里
つくしはら 豊澤の里 | |
| | 鷺森神明宮
さぎのもりしんめいぐう | |

三鈴坂 さんすざか
 興雲院 こううんいん 蟲喰観音
 寶音齋其角墓 ほうしんさいかくのはか
 上行寺 じやうぎやうじ
 雉子宮 きじのみや
 白銀妙見堂 しろかねめうけんどう
 明王院 みやうわういん 子安観音
 蟠龍寺岩窟辨財天 ばんりゆうじ いはやべんざいてん
 早尾權現 はやおゑけんげん 曳比須大黒祠 鐘樓 水神宮 愛染明王 大行車權現 石不動 稻荷祠 地藏尊 吉祥天祠 天満宮 鬼子母神 十羅刹女祠 虚空藏堂 遮軍神祠 結神祠 役小角 三佛堂 子安明神 痘瘡神 粟島明神 石
 日如来 秋葉權現 六所明神 荒神宮 辨才天祠 地藏尊 觀音堂 此ひさうでら
 地蔵尊 稻荷祠 前不動 樓門 獨鈷の淵 鷹居の松 名産館屋 虛無僧寺 東昌寺
 勢至堂 千代ヶ崎 絶景観
 金毘羅權現社 こんぴらごんげん
 松秀寺 しょうしゅうじ 日限地藏尊
 梅ヶ茶屋 うめがぢやや
 二本榎覺心寺 にほんえのきやくしんじ
 圓真寺 えんしんじ
 元三大師堂 袖ヶ崎 もとさんだいしだう 袖ヶ崎
 鎌作觀音堂 かまつくりくわんおんだう
 夕日の岡 ゆふひのおか
 安養院寢釋迦堂 あんやういんねしやくだう
 安養院寢釋迦堂 あんやういんねしやくだう
 誕生八幡宮 たんにじやうはちまんぐう
 富士見茶肆 ふじみぢやや
 蛸薬師堂 たこやくしだう
 瑞聖寺 ずいしやうじ 佛殿 天王殿 鐘樓 經藏 勤學寮 選佛場 木犀 牌堂
 清林寺 せいりんじ
 黃梅院の圖 わうはいいん
 白金高野寺 しろかねかうやでら 東西在番 所二ヶ院
 花城天満宮 はなぎてんまんぐう
 覺林寺清正公社 かくりんじせいしやうこう
 英一蝶墓 えいいつてふのはか
 承敬寺 じやうきやうじ
 正覺院 しやうがくいん 高野山宿寺ナリ 丹生高野兩社 三鈴松
 行人坂 ぎやうにんざか 般若塚
 太鼓橋 たいこはし
 目黒不動堂 めくろふどうだう 別當滿泉寺 本堂 經藏 八輪宮
 大鳥明神社 おほとりみやうじん
 祐天寺 りうてんじ 鐘樓 圓光大師堂 經藏 彌陀堂 二王門 開山廟
 碑文谷法華寺 ひもんやほつげじ 觀音堂 櫻木 二王門

奥澤淨眞寺 おくさほじやうしんじ 世に九品佛といふ 本品堂 地藏尊 開山廟 星の井 鐘樓 櫻木 寺寶 開山路傍
 滿願寺廣澤先生之墓 まんげんじくわうたくせんせいのはか
 龍泉寺 りゅうせんじ
 一ツ木ヶ原 ひとこけはら
 圓通寺舊跡 えんつうじ きうせき
 拾ひ櫻 榎地藏尊 百濟稻荷 虚空藏堂
 善光寺 ぜんくわうじ 信州善光寺智尊寺 觀音堂
 通明觀 つうめいくわん
 金王麻呂守佛觀音 こんわうまろまもりぶつくわんおん
 金王麻呂影堂 こんわうまろえいだう
 甘露水 かんろすゐ
 道立坂 だうてんざか
 赤坂御門 あかさかごもん
 一ツ木辨天堂 ひとこべんてんどう
 種徳寺狩野興意墓 しゆとくじかのこういのはか
 玉窓寺 たまどまうじ
 海藏寺 かいざうじ
 斥候塚 ちやくこうづか
 長谷寺 ちやうこくじ
 鶴ヶ谷 つるがや
 同産湯水 どうさんとうすゐ
 玉池 たまいけ
 同物見松 どうぶつみまつ
 赤坂氷川明神社 あかさかひまゐやうじん
 淨土寺 じやうどじ
 今井古城址 いまいんこじやうのあぢ
 鳳閣寺 ほうかくじ
 熊野權現社 くまのごんげん
 筭橋 すわなはし
 澁谷氷川明神社 しぶやひまゐやうじん
 朝霧ヶ瀧 あさぎりたき
 河崎高重宅舊址 かはさきたかしのたくきうし
 神仙水 しんせんすゐ
 駒場野 こまばの 蛇池 鐘鐺松
 大平山 おほひらやま
 古呂故天神社 ころこてんじん
 專修寺 せんしゆじ
 赤根山 あかねやま
 梅窓院泰平觀音堂 ばいそういんたいへいくわんおんだう 鐘樓 經藏
 心見觀音堂 こころみくわんおんだう
 澁谷長者墳墓 しぶやちやうじやのふんぼ
 室泉寺 むつせんじ
 澁谷八幡宮 しぶやはちまんぐう 矢拾観音 子安寮 師 金王廟 什寶
 姉尾光景舊館地 あねをみつかげきうくわんのち 駒松
 富士見坂 ふじみざか 富士見橋
 去我苦塚 きりがくづか

土器塚

足毛塚

氷川明神社

天満宮

北澤淡島明神社

池尻村祖師堂

子明神社

馬牽澤舊跡

若宮八幡宮

圓禪寺

常光寺

常盤橋

豪徳禪寺

照心堂

吉良氏古城址

宮坂八幡宮

實相院

弦巻郷

世田谷八幡宮

龍華山永安寺

氷川明神社

帶刀先生義賢之墓

慶元寺

石井神社

吉祥院

觀音寺

氷川明神社

天神の森

北見村除蝮蛇神符

禱善寺

稲毛重成墓

江戸遠江守舊館地

泉龍寺

廣福寺

長森稻荷社

韋駄天宮

升形山

飯室山

五所權現社

妙樂寺七面山

藥師堂

大師穴

十三塚

杉山明神社

稻毛藥師堂

舟田

橘明神社

同神廟

大戸明神社

登戸宿

同渡

最明寺

壽源寺

小杉御殿地

山王權現社

羽黒權現社

丸子渡口

四谷

牛頭天王社

鬼子母神堂

戒行寺

汐千觀世音

忍原

篠寺

四谷大木戸

内藤新宿

大宗寺

天龍寺

鯨河橋

一行院

古佛彌陀銅像

吾妻堤

千駄谷太神宮

遊女の松

仙壽院

龍岩寺

千駄谷觀音堂

千駄谷八幡宮

代々木野八幡宮

鞍懸松

代太橋

高井戸

鬼子母神堂

布多の里

布多天神社

虎柏神社

祇園寺

狛江入道舊館地

青渭神社

青渭堤

深大寺

同影向池

難波田彈正城址

深大寺城址 しんたいじししろみ	國分寺 こくぶんじ	阿彌陀坂 あみださか	武藏野翁 むさしのおきな	瀧の社 たきのやしろ	石塚社 いしづかのやしろ	紫草 むらさきぐさ	逝水 にげみづ	富士見塚 ふじみづか	傾城ヶ松 けいせいけまつ	府中驛舎 ふちゅうのりまやち
國分寺村炭竈 こくぶんじむらすみがま	阿彌陀堂 あみだだう	武藏野翁 むさしのおきな	瀧の社 たきのやしろ	石塚社 いしづかのやしろ	紫草 むらさきぐさ	逝水 にげみづ	府中驛舎 ふちゅうのりまやち	馬市御札 うまにちみくら	田面神事 たのめんしんじ	安養寺 あんやうじ
八はた八幡宮 はちまたやまて	六所明神社 ろくしょみやうじん	六所宮御旅所 ろくしょみやうごたびしよ	武藏國造兄武日命殿館舊跡 むさしのくにのみやつこえたけひのみことでんくわんのきやうせき	津保宮 つほのみや	陣街道 ぢんかいだう	小野牧 おののまき	谷保天神社 やほてんじん	假家坂 かりやさか	安樂寺 あんらくじ	日野津 ひのつ
八はた八幡宮 はちまたやまて	六所明神社 ろくしょみやうじん	六所宮御旅所 ろくしょみやうごたびしよ	武藏國造兄武日命殿館舊跡 むさしのくにのみやつこえたけひのみことでんくわんのきやうせき	津保宮 つほのみや	陣街道 ぢんかいだう	小野牧 おののまき	谷保天神社 やほてんじん	假家坂 かりやさか	安樂寺 あんらくじ	日野津 ひのつ
八はた八幡宮 はちまたやまて	六所明神社 ろくしょみやうじん	六所宮御旅所 ろくしょみやうごたびしよ	武藏國造兄武日命殿館舊跡 むさしのくにのみやつこえたけひのみことでんくわんのきやうせき	津保宮 つほのみや	陣街道 ぢんかいだう	小野牧 おののまき	谷保天神社 やほてんじん	假家坂 かりやさか	安樂寺 あんらくじ	日野津 ひのつ

八幡宮 はちまんぐう	同獵鮎 あゆかり	番匠ヶ谷 ばんしやうがやつ	二王塚 にわらうづか	横溝八郎墳墓 よこみちやちろうのふんぼ	天守臺 てんしゆだい	明覺寺 みやうかくじ	穴澤天神社 あなざはてんじんしや	青沼明神社 あをぬまみやうじんしや	洗間山 せんけんやま	萬願寺 まんぐわんじ	高幡金剛寺不動堂 たかはたこんがうじふどうだう	別旅明神 わかれたびみやうじん	百草八幡宮 もぐさちやまて	小山田關舊址 おやまだのせききやうし	沓切坂 くつかりさか	小澤小太郎居宅舊地 こざはこたろうきやたくのきやうち	小澤城址 こざはのしろあし	壽福禪寺 じゆふくぜんじ	吐王泉 とぎやくせん	諏訪社 すわのやしろ	平惟盛之墓 たひらのこれもりのはか	一宮大明神社 いちのみやだいみやうじん	延命寺 えんめいじ	赤坂臺 あかさかだい	威光寺 ゐくわうじ	向の岡 むかひのおか	法泉寺 ほふせんじ	多摩川 たまがは	木切澤 ききりざは	松蓮禪寺 しょうれんぜんじ	一本榎 いっぽんえのき	城山 しろやま	平臺 ひらだい	國安明神祠 くにやすみやうじん	都筑の岡 つづきのおか	展翼峰 てんよくほう
八幡宮 はちまんぐう	同獵鮎 あゆかり	番匠ヶ谷 ばんしやうがやつ	二王塚 にわらうづか	横溝八郎墳墓 よこみちやちろうのふんぼ	天守臺 てんしゆだい	明覺寺 みやうかくじ	穴澤天神社 あなざはてんじんしや	青沼明神社 あをぬまみやうじんしや	洗間山 せんけんやま	萬願寺 まんぐわんじ	高幡金剛寺不動堂 たかはたこんがうじふどうだう	別旅明神 わかれたびみやうじん	百草八幡宮 もぐさちやまて	小山田關舊址 おやまだのせききやうし	沓切坂 くつかりさか	小澤小太郎居宅舊地 こざはこたろうきやたくのきやうち	小澤城址 こざはのしろあし	壽福禪寺 じゆふくぜんじ	吐王泉 とぎやくせん	諏訪社 すわのやしろ	平惟盛之墓 たひらのこれもりのはか	一宮大明神社 いちのみやだいみやうじん	延命寺 えんめいじ	赤坂臺 あかさかだい	威光寺 ゐくわうじ	向の岡 むかひのおか	法泉寺 ほふせんじ	多摩川 たまがは	木切澤 ききりざは	松蓮禪寺 しょうれんぜんじ	一本榎 いっぽんえのき	城山 しろやま	平臺 ひらだい	國安明神祠 くにやすみやうじん	都筑の岡 つづきのおか	展翼峰 てんよくほう
八幡宮 はちまんぐう	同獵鮎 あゆかり	番匠ヶ谷 ばんしやうがやつ	二王塚 にわらうづか	横溝八郎墳墓 よこみちやちろうのふんぼ	天守臺 てんしゆだい	明覺寺 みやうかくじ	穴澤天神社 あなざはてんじんしや	青沼明神社 あをぬまみやうじんしや	洗間山 せんけんやま	萬願寺 まんぐわんじ	高幡金剛寺不動堂 たかはたこんがうじふどうだう	別旅明神 わかれたびみやうじん	百草八幡宮 もぐさちやまて	小山田關舊址 おやまだのせききやうし	沓切坂 くつかりさか	小澤小太郎居宅舊地 こざはこたろうきやたくのきやうち	小澤城址 こざはのしろあし	壽福禪寺 じゆふくぜんじ	吐王泉 とぎやくせん	諏訪社 すわのやしろ	平惟盛之墓 たひらのこれもりのはか	一宮大明神社 いちのみやだいみやうじん	延命寺 えんめいじ	赤坂臺 あかさかだい	威光寺 ゐくわうじ	向の岡 むかひのおか	法泉寺 ほふせんじ	多摩川 たまがは	木切澤 ききりざは	松蓮禪寺 しょうれんぜんじ	一本榎 いっぽんえのき	城山 しろやま	平臺 ひらだい	國安明神祠 くにやすみやうじん	都筑の岡 つづきのおか	展翼峰 てんよくほう

江戸名所圖會

天璣之部

卷之三

日吉山王神社 ひよしやまのじんじや 永田馬場ながたばばにあり。江戸第一の大社たいしやにして、別當は天台宗僧正てんだいしうそうじやうにして、觀理院くわんりゐんと號す。神主は樹下氏じゆげうぢなり。其餘社僧そのよしやそうおよび社家巫女等しやけふぢよさうめまた數多あり。御祭禮ごさいれいは隔年かくねん六月十五日

なり。その行粧ぎやうざうは、初卷茅場町御旅所しよくわんかやばちやうおたひしよの條下に詳つまびらなり。

本社祭神大宮ほんしやしさいしんおほみや 比叡ひゑの二宮小比叡大明神こひゑだいめいじんを勧請す、垂跡は國常立尊くにつたてのみことに。二宮 氣比宮けひのみやを勧請す、垂跡は仲哀天皇なかつあへんてうにして應神おんじん。

宮 客人宮きやくじんのみやを勧請す、垂跡は伊弉册尊いさだてのみことにして白山妙理權現しやうさんめうりけんげんなり。十一面觀世音菩薩じふいちめんくわんぜいおんぼさつを本地ほんぢ佛ほとけとす。江戸名所記えどなごしきに、第三には下の七社の中王子宮なかつんじのみや、本地は文殊大士もんじうだいしなりとあり。

古鰐口こわにぐち 昔は本社ほんぢに掛けたりとなり、今は右の方稻荷祠うまがらひのほらに掛けてあり、徑一尺あまりあり、其銘左の如し。

敬白奉納山王權現御寶前鰐口大檀那直景 願主南仙房



取部山王神社



武州豊島郡江戸館天正十四年戊戌十月廿五日

大田大和太工長瀬

按ずるに、昔は山王宮江城の中に入りし頃奉納せし門口なりしを、後稻荷の祠にかけしなるべし。古きを存せんが爲に、こゝにこれを擧ぐるのみ。

當社は淳和天皇の天長七年庚戌、慈覺大師勅によりて、武藏國入間郡仙波にある所の、星野山無量寺を再興ありて、圓頓の教法を弘め給ひし頃、佛法王法護持の爲、且は和光の利益を普く萬民に蒙らしめんと欲して、我立柚の日吉山王二十一社上中下の内より、一社宛を選て、三所の靈神を彼地に勸請し給ひ、かくて星霜を経たり。然るに文明年中、太田道灌此山王三所の御神を、星野山より江戸に遷し奉る。其頃の社地は今の梅林坂のあたりにして、嘗祠と並びてありし江戸城内建山王權現堂荒神祠香丞相祠云々。嘗祠は今の平川天神の事なり。御國初の頃迄は兩社共に御城内にありしを、嘗祠は平川口御門の外へ遷され、山王は御城の鎮守として紅葉山に遷座まし、くけるなり。天正よりこのかた、江戸を以て永く御當家御居城の地に定させられし頃、紅葉山において新に社を御造營ありて、御産神にあがめ給ふ。その後御城西貝塚の地へ遷され、其年歴詳ならず、江戸名所記に、後土御門院建徳年中印ひ再興修造ありと云々。此説未だ考へず。寛永明誓等の江戸圖によりて考ふれば、其社の舊地は井伊掃部侯の北、今の三宅備後侯の第宅の地なり。菊岡沾涼云ふ、山王宮の舊地は三宅備後守殿宅の裏の坂に祠あり。此所元山王の舊地なりとあるは實にしかり。又事跡合考に云く、井伊掃部頭殿の居館の南、うしる凡未申の方の小坂の際、中二間ばかり、長さ十間あまり松杉の少しき繁りたる坂の内に、稻荷の小祠ある餘地、是山王一度半藏御門外にうつされし古跡の由緒と云々。

又承應三年甲午、回祿の後、溜池の築山勝地たるにより、竟に台命あつて、いまの地へ遷座なし奉り、宮社御造營ありしより、江戸第一の宮居となれり。名勝志に云く、明誓丁西の幾回祿によつ奉るとあれども、承應は明誓より先の年號なれば、此説證と云々。金殿玉樓は天に輝き、畫棟朱簾は地に映ぜり。名勝志するにたちず。或人云ふ、萬治元年今の地にうつると云々。しかありしより已降、和光同塵の利益淺からず、内には圓宗の教法を守り、は元松平主殿殿第宅の地なりしとあり。外には鎮國利民の徳を施し給ふ。殊更、御當家の御産土神として、御崇敬最も厚く、天下泰平、國家安鎮の御祈禱、永世に怠る事なし。

成田下總守長泰舊地 永田馬場山王の隣、丹羽家の地なりといふ。古へ武州忍の城主なり。

第六天祠 同所兼松家の地にあり。太田左金吾道灌の勸請なりといひつたふ。

平川天満宮 御城の西、麴町三丁目の南、平川町にあり。別當は天台宗にして、長松山龍

眼寺と號け、東叡山に屬す。

傳云ふ、當社は文明十年戊戌六月廿五日太田持資當國入間郡川越三芳野の天神を江戸城に勸請し、數株の梅を栽ると云々。今の御城内、平川の梅林坂と唱ふるは、其梅林の舊跡なり。新安手簡に文明中太田道灌築

其後天正十八年御入國の頃、彼宮を平川口の外へ移さる。友山翁云ふ、江戸御入府の節平川より貝塚へ遷さるる故に、貝塚の天神とも云ふといへり。故に平河の天神と唱へ奉る。此故に今の駒町の地に至りても舊名を改めず、猶社邊の町をも平河町と云ふ。又、其後慶長に至り、御本丸御造營の頃、竟に今の麴町に地を改めさせ給ふ。大道寺友山翁云く、平河御門の外に平河町と唱ふるありて、夫より今の天神の社を預り、藥師堂のかたはらに遷しまるせしに、町屋も公用の地となり駒町の邊へ引かれしきさみ、天神の社も共に移すと。又縁起に、駒町に薬師堂ならびに八幡宮の小社ありける所を、天満宮の社地と定めてうつさせられ、今に至りて舊地の名を改めず、天満宮の社内に彼八幡宮も勧請して文武兩道を守らせらると云々。

寛政七年修營ありて、神殿清新なり。毎年二月二十五日、菅神自畫の神影をかけて、諸人に拜さしむ。

梅花無盡藏云

余比寓武之江戸城。城有丞相祠堂。栽柳插松。不知幾數百株。文明丙午仲春二十有五。適值丑之晨。寔也之所少也。謹賦小詩。題丞相之壁上。夫徑山之傳衣。迺涉茫之說。而國史亦不取之也。故未及茲云。

北野春遮西府雲 一籬此地亦栖君

夢中傳法定焉有

松亦應云梅亦云

同書云

遊江戸城菅丞相祠堂

開闢評花甚不公

獨居南面牡丹紅

若令丞相細分州

梅亦應編王者中

宋末江湖梅亦孤

吟香白髮老浮屠

橫斜月瘦一枝影

分作文公大極圖

同書云

花下晚步詩序

身居關左。而名博海內者。太田二千石灌公靜勝是也。公會宴坐一室。夢中見接菅丞相。其翌早有人。卒然來獻丞相所親筆之畫像。可謂靈夢也。遂建廡於江戸城之北畔。寄數十頃之美田。歲時鼓焉。栽培梅數

平川天満宮



百株、頗超於錦城之梅花海也。前年丙午之春。共公遊。庶下。詩之評。歌之講。爛漫花前。無愧洛社之耆英也。同秋之孟二十六公逝矣。余造文祭之。今茲丁未正月下浣。率數輩之縉侶。徘徊菅廡。追憶前年之遊事。豈非夢一覺邪。感慄無措。余欲鼓。飯棹。飯岐陽。未能果。漫賦四十言云。

移少一筇瘦 餘寒鶯度稀 去年丞相廡 今日故人非

老眼看花落 舉頭疑雪飛 岐陽千里外 山可笑遲飯

貝塚

都て麴町の邊の總名なり。此地は昔よりの甲州街道にして、其路の傍にありし一里塚を、土人甲斐塚と呼ならはせしとなり。或説に貝塚法印といへるが墓なりともいひて、さだかならず。此地馬場の南は芝の青松寺の舊地なり。南向亭云、青松寺は青松甲斐といふ人の草創にして、當時玉巖氏の邸にある。を貝塚といふ上に古碑あり、年月もみえず平氏女とばかりあり、今は八幡に祀ると云々。また麴町四丁目の南の方玉巖氏の下に甲斐庄氏なる宅ありし故ともいへり。

按ずるに、貝塚の地名、小田原北條家の古文書に、太田大膳亮といへる人、一本ヒトツギの内にて貝塚の地を領するとあれば、其頃も此地名ありしと知るべし。然るときは貝塚は一木の内の小名なりしとまほし。

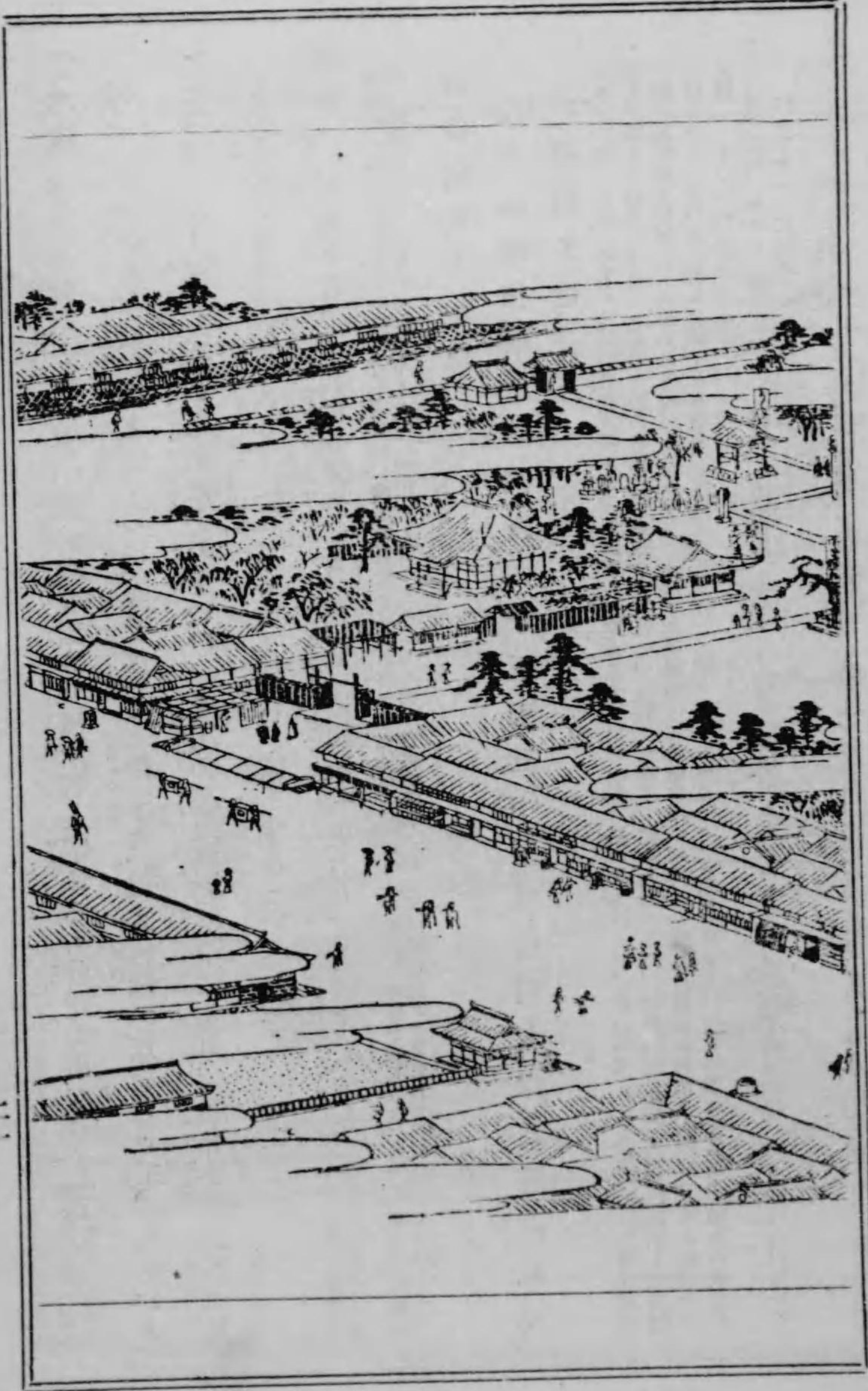
村高山栖岸院

麴町八丁目の右側にあり。淨土宗にして、洛の知恩院に屬せり。本尊阿彌陀

如來は、惠心僧都の作、開山は妙譽眞入上人と號す。開基は安藤對馬守重信なり。昔は長福寺と號して三州にありしとぞ。當寺に賴朝の念持佛と稱する、聖觀音の靈像を安置す。前記に安置する所の觀音の像は楠正成尊信の靈像なりといふ。七月十日は千日參と唱て、參詣頗る多し。

寅樂師如來 同北の横小路、坂より上、道の左側、常仙寺といへる禪刹に安置せり。此藥師佛の像は、行基大士の作なり。相傳ふ、此靈像永祿の頃迄は、三州鳳來寺の山の麓に立せ給ひしが、往古當寺開山祥岩存吉禪師、參州新城にありて、いまだ凡俗たりし頃、俗姓は安田氏といふ。此靈像虎に化現し給ひ、狼の難を遁れしむ、依て其後法恩の爲に出家し、江戸に來りて、四谷鹽町の明雲山龍昌寺といへる禪刹に住す、其頃當寺を闢いて、此本尊を安置せしとなり。毎月八日十二日參詣多し。此本尊ある故に此小路を藥師橋町とよべり。

千手觀世音 同九丁目の右側、常榮山心法寺といへる淨刹に安置す。此靈像は秦川勝の念持佛なりといへり。閻浮檀金立像一寸八分ありと云ふ。當寺は京師知恩院に屬して、本尊は阿彌陀如來、惠心僧都の作、開山は然翁上人と號す。當寺洪鐘の銘に、市谷庄とあり。觀音堂に關王十王の像ある故に、正月と七月の十六日參詣多し。



常仙寺
寅茶師堂
心法寺



清水坂

尾州公御館と井伊家の間の坂を云ふ。

清水谷と唱ふるも此邊の事なり。狗町八丁目へ出る坂下までも清水谷の内なり。

此所の井を柳の井と號くるは、清水流ると柳蔭といへる古歌の意をとりて、しかいふ

となり。富士見坂は松平出羽侯の前をいひ、玉川の瀧は同じ庭中にあり。駒井小路は富士見

坂の上の方なり。駒井氏こよに住せらるゝ故に、號とするといへり。

櫻田

古の郷名なり。

和名類聚抄にも、荏原郡櫻田

良太

とありて其稱尤も久し。今は豊島郡に屬せり。役帳に、太田源七郎及び牛込宮内少輔勝行、興津加賀守、會田中務丞等其餘の所領にも往々櫻田の地名を注し加ふ。櫻田久保町、同兼房町、備前町の類ひ又今の麻布六本木の南に櫻田町と唱へてあるもの同所百姓町等いづれも御入國の後かしこに地を管へ給ひしなりとせ。

武藏國風土記曰

荏原郡櫻田郷。公穀四百六十三束三字田。號櫻田者。以其郷之岡及野櫻樹多也。云云

太平記に云、元弘三年五月武藏野合戦の條下に、九日軍の評定ありて、翌日上總下總の勢を討て後、敵の後攻とて金澤武藏守守將五萬餘騎を差副て下河邊へ下る。一方へは櫻田治部大輔貞國を大將にて、長崎二郎高重、同孫四郎左衛門、加治二郎左衛門入道に、武藏上野兩國の勢六萬餘騎を相添て、上路より入河へ向らるゝとあり。新書聞集に、櫻田は虎の御門より愛宕の邊迄田地にて、畔には櫻の樹幾千本も植ありし。田の中の流れを櫻川といひし、今は源助橋其印とて残りたるとかや云々。又求涼亭云々、櫻田の櫻は御入國の後今の吹上の御庭中へうつされしとぞ云々。

按ずるに、いにしへ櫻田と稱せし地は、今櫻田御門など唱へ、内櫻田外櫻田といふあたりすべて山下御門の西、虎の御門の外迄の名にしてすべて其舊跡なりん歟。

柳の井



櫻井
井伊侯の藩邸の
前あり



櫻井 井伊侯藩邸表門の前、石垣のもとにあり。且り九尺ばかり、石にて疊し大井なり。

釣瓶の車三つかけならべたり。或は云ふ、事跡合考に、井伊家中屋敷四谷喰違の屋敷ともあり。若葉井は同所御堀端番屋の裏にあり。柳の木をうゑし故に柳の水ともいへり。いづれも清冷たる甘泉なり。

霞ヶ關舊蹟 櫻田御門の南、黒田家と浅野家との間の坂を云ふ。往古の奥州街道にして、關門のありし地なり。宗祇法師の名所方角抄に、霞ヶ關は西に高き岳チカヤマあり、東向の所なれば富士はみえず、西上り河流れ橋を過ぎて霞村といふ所、霞ヶ關の舊地なりといへど、霞村と云ふ地名なし。

武藏野地名考云

或古記曰。荏原郡霞關。日本武尊蝦夷之儲關也。爾來連綿大被置之。舉國之勝景。而然其遠眺隔雲霞。故有霞關之號。云云。

續千載

おなじくば空に霞の關もがな雲井の鴈をしばしとどめん 爲 世



霞ヶ關古圖



同

わかれ行く春の霞の關守もすぐる月日をとどめやはする

宣子

新拾遺

いたづらに名をのみとめてあづま路の霞の關も春ぞくれぬる

讀人不知

新明題

關の戸にきよしやそらね鳥が鳴くあづまの山は霞こぶかき

仙洞

夫木

立ちとまる霞の關の朝ほらけ花も幾重かにほひそふらむ

龜山院

同

あづまには霞を關の名に立てて春來ることを人に告ぐらむ

慈鎮

同

わけそむる關路の名のみ霞にて末は霧なるむさし野の秋

爲守

同

心あてにそれかとぞみる櫻花かすみの關の春のゆふぐれ

光隨

同

そらにたつ春の霞の關もりや朧月夜の名をとどむらん

爲氏

名寄

くれぬとも春のなごりを忍べとや關に霞の名をとどむらん

顯氏

回國雜記

名にきよし霞の關を越えて、これかれ歌よみ連歌などいひ
すてけるに、

あづま路の霞の關に年こえて我も都に立ちやかへらん
都にといそぐ我をばよもとめじ霞の關も春を待つらん

道興准后
同

溜池

赤坂御門の外より、山王宮の麓を東南へ繞る。昔神田玉川の兩上水、
いまだ江城の御

もとへ引せ給はざりし其以前は、此池水を上水に用られしとなり。

寛永明曆等の江戸の圖に、赤坂溜池に江戸水道の水源と記してあり俗

間此池を狭山の池とすは大きな誤なり四巻目に詳なり

往古鈞命によりて、江州琵琶湖の鮒、および山城淀の鯉等を、活なが

ら此池に移し放たしめられたりとて、形すこしく他に異なり。又蓮を多く植られし故に、夏

月花の盛には奇觀たり。又池の堤に榎の古木二三株あり。是を印の榎と名づく。昔淺野左京

大夫幸長、鈞命を奉じて此所の水を築止めらる。其臣矢島長雲是を司り、堤成就の後、其功

を後世に傳んため、印にとて栽けるとなり。此堤より麻布谷町の方へ下る坂を榎坂といへる

も、前に述る所の榎ある故とぞ。又同所堤の北の方、辻番所の脇、堰の傍に葵を植たる地あ

り。土俗葵ヶ岡と呼びならはせり。この所より東へ向ひて下る坂を葵坂と號く。

按ずるに、小田原北條家の古文書太田新次郎所領に、江戸櫻田池分といふ地名を注し加ふ、おそくは此溜池などの事を云ふならん歟。

靈南坂

溜池の上より麻布へ登る坂をいふ。慶長の頃、高輪の東禪寺此地にあり。寛永九年の江

東禪寺溜池の上有り。彼寺の開山を靈南和尚と稱す。道光を慕ひて坂の號に呼べりとなり。潮見坂は同所

松平大和侯の表門前に傍うて、溜池の上より東へ下る坂をいふ。江戸見坂は靈南坂の上より、





土岐牧野兩家の北の脇を曲りて、西窪の方へ下る坂なり。

麻布山善福寺 麻布雑色にあり。昔は龜子山と。親鸞上人弘法の地にして、當宗關東七箇の大寺

の一員、了海上人開山たり。龜山帝の勅願、本尊阿彌陀如來の像は、惠心僧都の作なり。往古

は南紀の野山に象て草創ありし梵宇にして、初は眞言密乘の勝區たりしが、貞永元年壬辰、

了海師親鸞上人の弘法に歸化し、宗風を轉ず。支院十餘宇あり。小田原北條家の所領役帳に、島津孫四郎

地名を加へたり、當時の事をいへるなるべし。

藏王權現堂 本堂の南岳の上にあり。當寺の開山堂にして、了海堂また麻布權現とも稱す。傳へいふ、開山了海上人在世の頃藏王權

現老翁の形に現じ、上人にまみえて法義を聽聞し給ふ事しばしばなり、又ある時告て宣はく、汝今本願一實の大道に

もむく、我殆ど是を喜ぶ、故に一面の形を與ふ、汝又自の像を影法し、其胎中には是を收めよ、となり。依て了海上人自ら斧を下して自の

像を送り、其神告に任せて假面を胎中に收めらるるとなり。此地の鑛守と稱して毎歲七月十五日草角力闘行神事あり、また十一月三日は

開山御身試と唱ふる行事あり。則ち開山忌なり。此日新に水鏡を送り、彼の木像を浴しまらせ平座に安ず、其間僧徒等阿彌陀經を讀誦す。

杖銀杏樹 開山堂の前にあり、繞りに石垣をめぐらす。相傳ふ、親鸞上人了海師に附法ありて後こゝを去り給ふの日、その携ふる所

葉繁茂し香々たり。故に逆銀杏樹とも號くるとなり。

鹿島清水 惣門と中門との間にあり。往古弘法大師、常陸國鹿島明神に乞得たまひし阿伽井なりと。又土人曰く、鹿島の地に七井

と稱する源泉あれども、其中一ツは空水なりといへり。昔は其側に柳樹ありしかば、一名を楊柳亦とも唱へ侍ると云々。

寺記に云く、中興開山了海上人は烏羽院の苗裔、左大臣藤原信實公の息男なり。信實公故あり

て當國に放れ、品川の近邑にあり。今の大井村は其舊地なり。第二の信實公一子なきを憂とし、藏王權現

に祈請し給ひければ、其室白布を呑と夢見て懷妊し、建仁元年辛酉林鐘十五日に一男子を誕

生す。了海上人其時後園松樹の下に、忽然として清泉涌出せり。此故に了海上人の幼名を松君と號け、里の名

を大井と唱へたり。猶大井弘福寺の條下に詳

り。依て人皆奇異とす。此兒七歳の春、父に告て出離の志ある事を顯せり。故に實相寺の範賢

律師に投じ、鬚髮を剃除して了海と號く。一書に叡山に登り靜養僧都に從

はり、是より後數學窓に身を委

ね、諸宗を濟り、竟に古郷に歸り、本願弘興の基趾を求めんとし、則ち藏王權現の叢祠に詣し、

是を祈り、靈瑞によりて此地に至るに一精舎あり。今之善福寺なり、神の教なる事を知りて、こゝに

止住し年を歴たり。然に貞永元年壬辰、親鸞上人東國經回の時、適當寺に入り給ひしかば、

海師其夜試に屈請し、談するに三密論伽六即止觀を以す。親鸞上人是に答ふる事、響の音に應

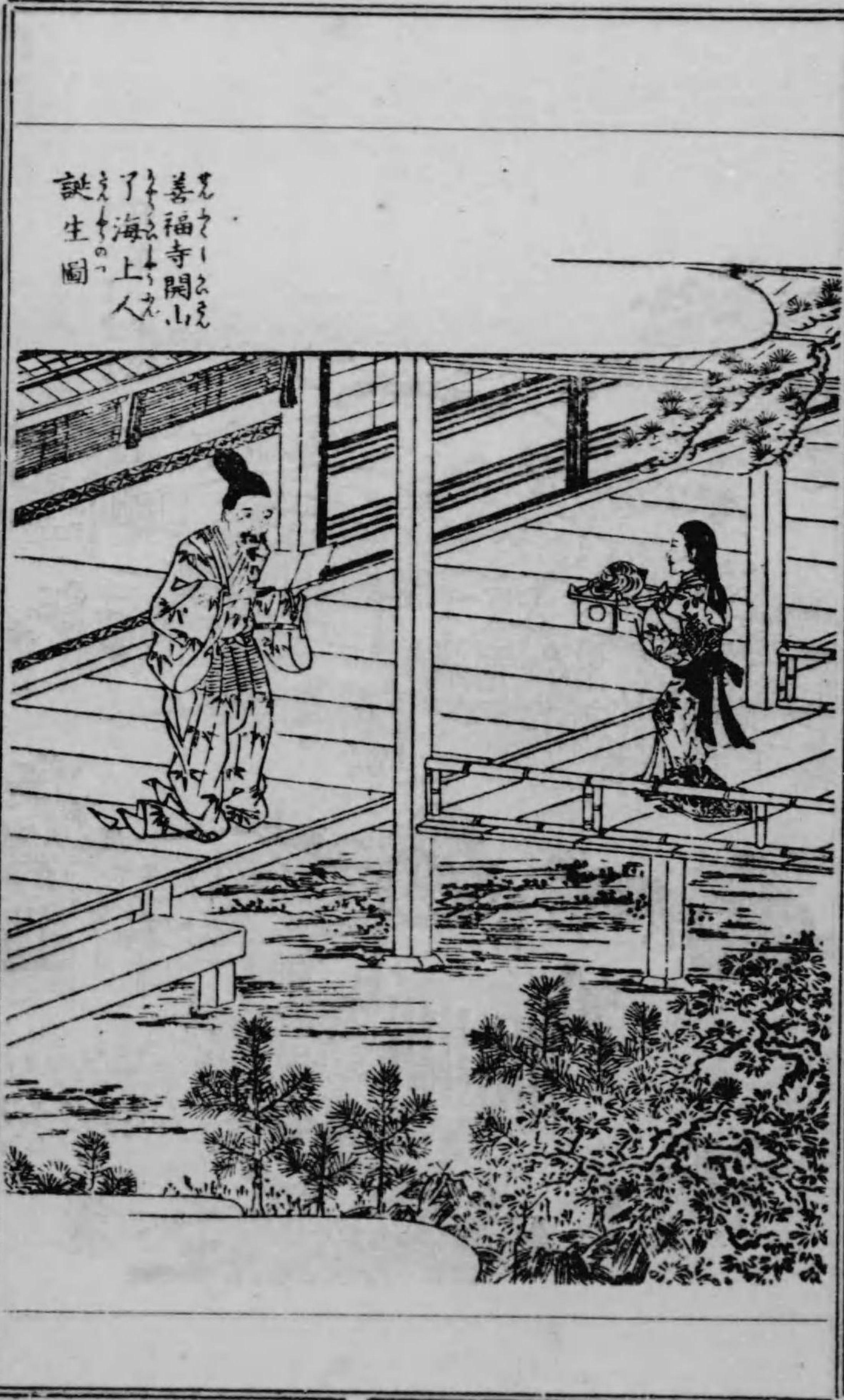
ずるが如し。竟に念佛往生の理を論するに至り、海師直に親鸞上人の弘法に歸降し、師資の約

嚴にして、是より宗風を轉じ、化を布く事遠近に普し。直第六老僧の

麻布
善福寺

丙寅春過龜子山
善福寺櫻花下吟
獨憐不語無知己
偏向春風索咲多
怎奈遊人先注目
也應拍手自相歌
心越禪師





麻布一本松



前念命終後念即生の素懐を遂られたり。

以上寺記及び二十四輩豐場記の意を採る。佛光寺の實録に云く、了海上人は元應二年庚申正月廿八日八十二歳にして寂す。武藏國阿佐布禰福寺と號す。御應元年誕生、廿四歳の時祖師圓寂云々。傳燈系圖、元應二年十一月六日寂す。又大谷遺跡録に云ふ、延和後十六年弘安元年四十歳の頃正寺に入第四世の寺務となり。永仁五年願念誓海に寺務を譲り武州麻布に下る(五十九)元應二年の春高月化縁の薪盡きて廿八日即生後念の素懐を遂げたまひけりとありて、化寂の時世違へり。猶可考のみ。

弘法大師刷毛書名號 弘法大師入定したまふ前の年、再び當寺に來り給ひ、承和元年三月十五日空海書と染筆し給ふとなり。今猶傳へて當寺に存す。八字名號 親鸞上人歸洛し給ひしに海師調す、上人云く、故は關東にありて門徒を教化すべしとて、南无不可思議光佛と繪墨を灘がれ、是を海師にたまふ。故に當寺什寶となるといへり。

當寺は弘法大師草創ありしより已降、一千餘歳を経たる古藍なり。殊更文永三年の秋八月、龜山帝勅して願寺となさしめられ、薦紳一員、誥壘及び俸田を賜ふ。境内に古墳多く、最も古跡なる事明けし。今一向専修の宗風盛にして、化導遠近に普し。

一本松 同所北の裏通、一本松町道の傍にあり。一株の松に注連を懸け、其下に垣を廻らせり。里諺に云く、六孫王經基此地を過る頃、此松に衣冠を懸け給ひしとて、冠松の名ありとも、其餘さまざまの説あれども分明ならず。今此邊を一本松と號して地名となれり。或は云ふ、小野篁が植る所なりとも。

按ずるに、氷川明神の別當禰乘院より、此松樹の注連をかけかゆる事怠らず。或人いふ、此松は氷川の神木なればなりとぞ。此説是なり。されど昔の松は枯て今若木を植置けり。

氷川明神社

同通り南の方上野町道より左側にあり。麻布の惣鎮守にして、祭禮は八月十七日なり。相傳ふ、文明年間太田道灌、當國一宮氷川明神を勸請する所にして、舊地は同所宮村の切通坂にありしとなり。別當は眞言宗にして、德乗寺と號す。古老云ふ、昔の二鳥井は同所長坂に地なりしとぞ。其舊地今は縁山の住持退隱の地となれり。露白和尚寛文二年の九月はじめて此地に隱居ありしとなり。其頃今の所へ社をうつせしなるべし。元祿の江戸圖にも麻布明神とあり。

七佛藥師如來

寺内にあり。縁起に云く、本尊藥師如來は傳教大師の作にして、七佛の其一員なり、そのかみ六孫王經基の持念佛たりしにより、永承年間頼義朝臣鎌倉へ移され、後代々の官領崇敬あり。然に長祿の頃、太田道眞當國河越の城中に安置し、又文明に至り、其子道灌江戸平川に移せり。然に慶長五年、大神君關原御陣の砌、慈眼大師に命ぜられ、此本尊に御祈念ありて卷敷を獻す。今此例によりて正。同九年神田の臺に移さる。河臺にあり。又其後下谷廣小路にて地を賜ひしとぞ。其の一本に、廣小路の藥師成の年の火事以後、南榮園へ移るとあるは、此藥師の事也。成の年といふは、天和二年壬戌の事なるべし。下谷にありし頃は崇源院殿の御建立なりしとぞ。公家の記に、天和二年十二月二十八日類火に遇

七佛藥師
氷川明神



霞山
稻荷社



ひ、御用地になり麻布 竟に貞享元年今の地へ移されけるといふ。其旨趣を慈眼大師の眞筆を染られし一軸の縁起あり。當寺昔は仙波喜多院に屬せしが、慈眼大師の時より上野に屬せり。

霞山稻荷明神祠 櫻田町道より右にあり。往古は櫻田霞關にありしを、御廓定りし頃、今の地へ移さるといへり。別當は天台宗にして、霞山櫻田寺觀明院と號く。本尊吃枳尼天

像は、足利義國の守神にして、行基大士の作、秩父重康安置せりと云ふ。相傳ふ、當社は澁谷莊司重國勸請し、文明中道灌再興せり、又往古右大將賴朝卿、櫻田村にて美田五百七十石を寄附ありて、供田の印に櫻樹を植る、要害を構て、江戸太郎重長をして往來を改めしむ、其後遙に年月を歴て、此地と共に社を麻布へ移されしとなり。今麻布櫻田町百姓町、など號くるは、則ち櫻田より引かれし町なり。

朝日觀世音 同向側專稱寺といへる淨家の精舎に安置す。本尊觀音の像は、長者丸の叢より出現あり。故に作者何人なる事をしらす。當寺は三光院清心尼の開創ありし寺院にして、本尊も又此尼の尊信ありし靈佛なりといへり。清心尼は織田信長公の侍女にして、筒井の願慶が姪なり。薙髮して後増上寺第十六世深翠上人の弟子となる。子安樂師如來 同南に竝ぶ、眞言宗正光院といへるに安置す。本尊瑠璃光如來の像は、惠心



廣尾
祥雲寺





廣尾
昆沙門堂



僧都の作にして、一條帝御降誕の時の、御祈願の本尊なりしと云傳ふ。

瑞泉山祥雲禪寺

廣尾町にあり。

北條家所領後、興津加賀守櫻田の内平尾の地、花洛大徳寺派の禪刹にし

て、本尊に釋尊を安置す。開山は龍岳大和尚、開基は松平筑前守長政なり。其法號なり。支院

八字あり。昔は赤坂の藩邸にありしが、麻布谷町の上の方へうつし、竟に明暦四年今の地に引くとぞ。

毘沙門天

同所四町斗巽の方、澁谷川の北岸、多聞山天現寺といへる禪刹に安置せり。本尊

毘沙門天の靈像は、樟の丸木作にして、聖徳太子の彫造なりといへり。其丈三尺一寸相傳ふ、多田

滿仲の念持佛にして、源家累代守護の靈像たり、傳通院殿深く尊信ましく、安部攝津守信

春に御預あり、其後仙石因幡守久信の家に傳へ、又祥雲寺に收め、竟に當寺を開創し、始て

こよに安置せり。本尊來由の記は林學士信元(アミツ)先生の文章にして當寺の什寶たり。

武州豊島郡城南麻布邑。多聞山天現禪寺。毘沙門天王緣起

從五位下守大學頭 林 信 充 誌

毘沙門者北方天王而號多聞也。西土以北方爲上。此王福德之名聞

四方。北方多聞之名乃明著矣。護四埵之水精埵。將諸閻又衆無量百千。以爲眷屬也。有一尊像于此。相傳我

東照君尊母公傳通院殿。析參州鳳來寺峯樂師時十二神之中。寅神。應靈夢之祥。君以寅歲降誕也。故因母公之訓命崇尊焉。蓋聖

德太子。以楠木手自作之。其長三尺一寸。源家嫡流贈正一位滿仲公所傳來尊像也。良有以哉。君之崇尊也。慈眼大師書。

東照大權現守御本尊之九字于板木傍。其筆痕今尙存矣。君每臨攻城野戰。無不攜行此像也。拔群超類。撥亂反正。掌握天下。安撫海內

者。乃此像之威德也。唐天寶年中。西源府之圍臨危。而誦仁王蜜語。見神人五百員。且見金鼠咬敵弩弦。皆絕矣。咸通中西川現僧相天王者。

皆此靈所成也。倭漢雖異。所其信從誠同矣。君傳長久之業。而開太平之基者。可謂非人力之所及也。厥後近臣安部大藏信春。奉命預



廣尾原



廣尾
水車



香華供養之事。信春亦以寅歲奉護之也。嫡子彌市郎信包亦寅歲而愈恭仰不黜也。信包嘗衛護大坂城之初年。鎮坐其城內也。歷年之後。官命無及此像事。故於江府品川私第。揄地建堂。自茲任攝州刺史。官祿增益。齡過九十旬。其曾孫信峯。任丹波刺史。尚猶傳之。然有故贈仙石壹岐守久信。傳之尙矣。平生通志于祥雲寺。怡谿和尚甚厚也。久信母見遷座之靈夢數多也。久信馳使介告怡谿曰。靈像頗有靈夢。且有俗家不堪恐懼也。怡谿任其志。移之寺內。法子良堂和尚感其像之重。其驗之大。新建天現寺。安此像于一堂。以祈妙驗矣。頃間請僕記其來由。不能默止云爾。

毘沙門天王緣起終

光孝天皇御陵石燈籠毘沙門堂の前左の方にあり。御影石の燈籠にして、其古雅なり。り、いづれの頃にかありけん。金森家より寄附ありしといふ。

土筆ヶ原澁谷川の南の原をしか名づく。又此邊を豐澤の里と呼べり。上中下にわかれて澁

谷の地に屬せり。

鷺森神明宮同所相模殿橋より南の方、田島町の右にあり。別當は天台宗にして、報恩寺兼

帶す。祭禮は五月廿八日なり。相傳ふ、後冷泉院の御宇、賴義朝臣東征凱歌の時、白旗を收め祀るといふ。

氷川明神社同所南の方、三鉾坂の下、東の通り右側にあり。白銀の鎮守にして、祭禮は九

月十九日なり。傳へ云ふ、日本武尊當國一宮氷川の御神を遙拜し給ひし舊跡なりとぞ。

雷電宮同社地より北にあり、相傳ふ、白河院の御宇當國疫疾流行す、氷川明神の神託あるによりてこゝに此御神を勧請すと云ふ。千手觀音を本地佛とす。

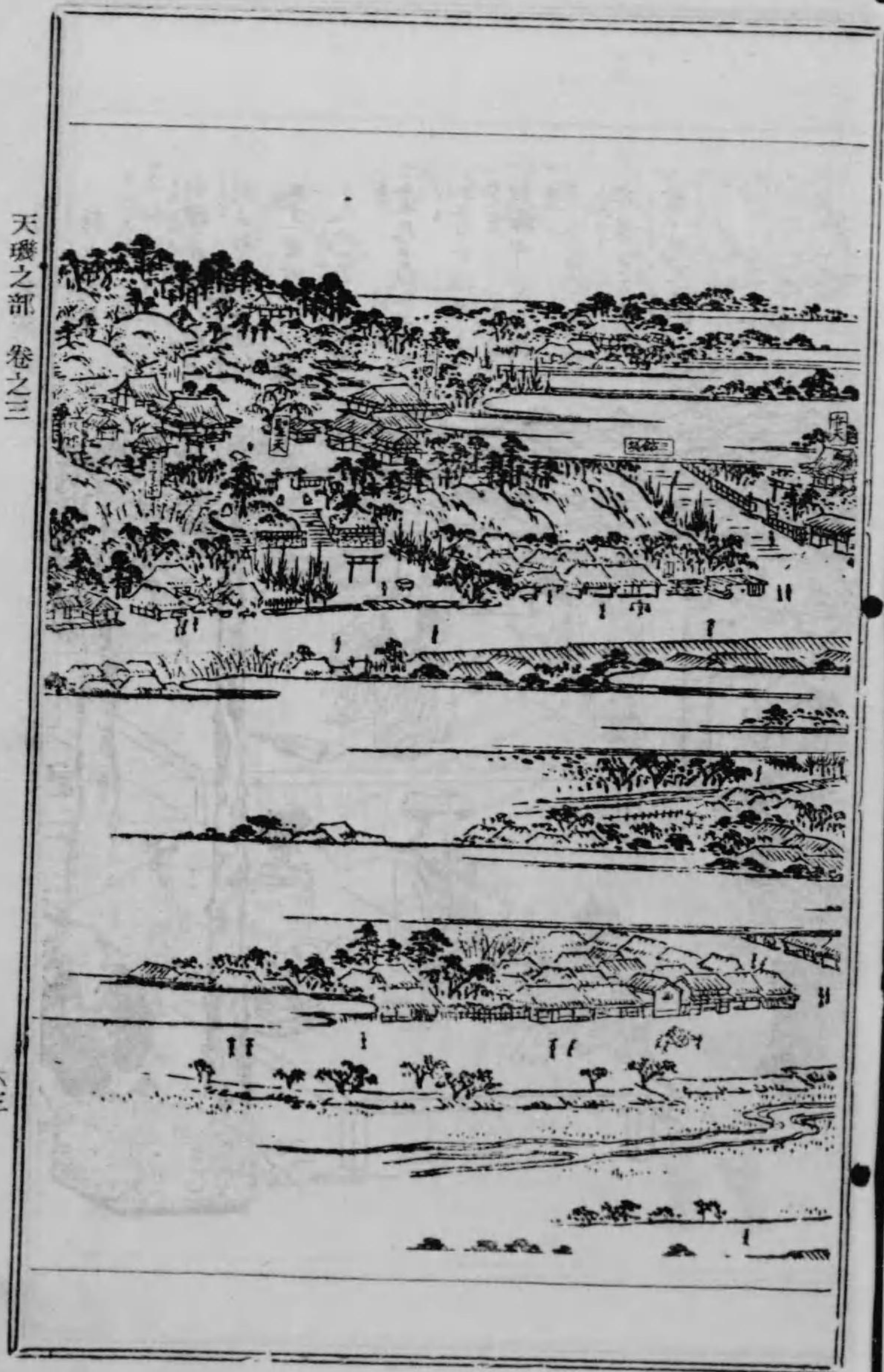
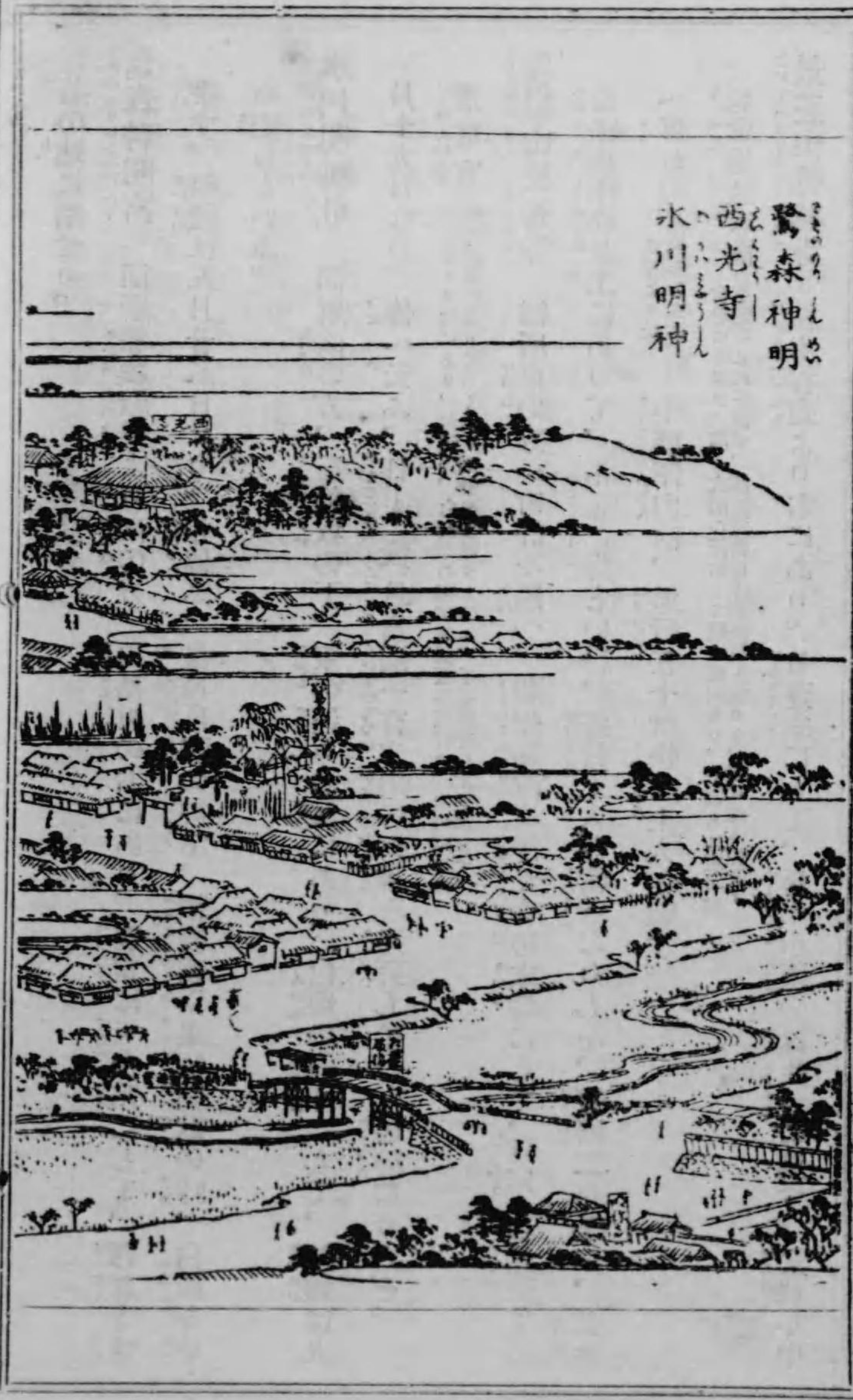
冬嶺山松秀寺同所東の方一町許を隔つ。相州藤澤清淨光寺の末寺にして、時宗の道場なり。

昔は武州高井土にありて、常光寺といひ、遊行上人の宿寺なりしを、寶曆二年壬申、此地へ移れり。其時より松中興開山は、遊行五十世快存上人と號す。

延命地藏菩薩當寺に安置す。徳一大師の作にして頗る靈驗あり。祈願ある輩日數を定めこれを念ず、故に道俗日限地藏尊と稱せり。常に諸人絶えず。

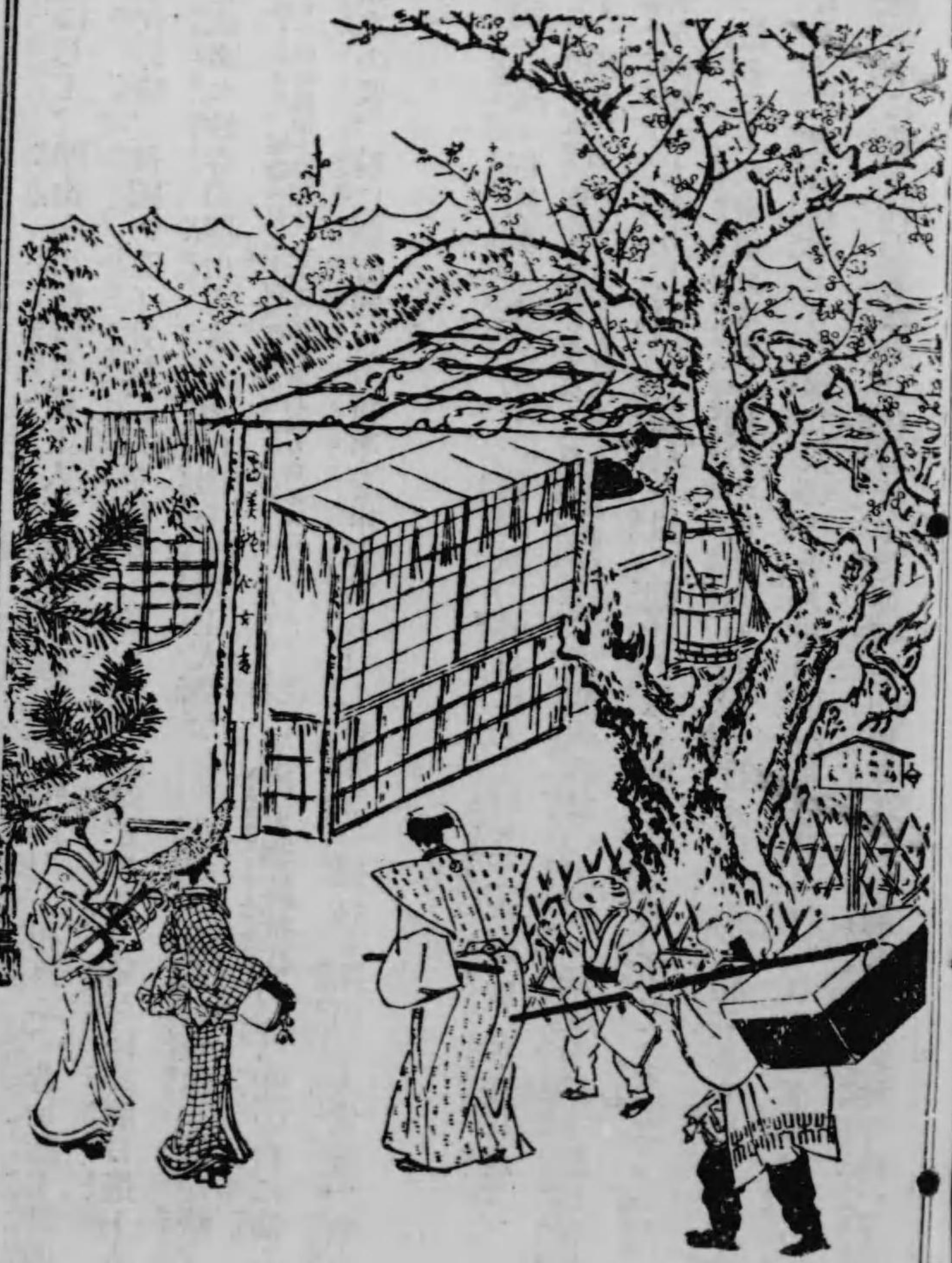
最正山覺林寺樹木谷道より右にあり。日蓮宗にして、房州小湊の誕生寺に屬す。元祿年中

鷺森神明
西光寺
氷川明神



梅ヶ茶屋

三結坂より左の方
 白銀水川の社に
 側あり一年遊行
 五十二世何一海
 上人此家の梅を
 愛たり以一首の
 和奇と詠せり
 白梅やう床梅と
 号するは二月の
 茶芳まきり
 世に越て馬



の開創にして、開山を可觀院日延上人と號す。小濠十八代の實主にして、老後此地に隱栖あり。相傳ふ、昔加藤主計頭清正朝鮮征伐の時、彼國の王子連枝二人を日本へ連れられ、沙門となし、兄をば高麗日遙上人と號し、肥後國本妙寺の開山とす。弟は則ち日延上人是なり。當寺に清正の畫像一幅を藏す。前生自ち畫かれしとなり。毎歲六月二十四日祭祀す。正五月も二十四日毎に神前前において千卷陀羅尼を誦す。武運を祈る輩利益を得る事限なしといへり。又清正朝鮮征伐の時、兜の内に籠られし釋迦如來の像、竝に朝鮮國より軍事を申し送られし書簡等、何れも開山上人當寺へ收られしとなり。

龍吟山興雲院

同所坂の上上にあり。曹洞派の禪林にして、芝二本榎廣岳院に屬す。

本尊十一面觀音。世に蟲喰觀音とも稱す。西緣起に云ふ、聖武天皇の御宇、嵯文會稽主動和州長谷寺の觀音を刻彫なし奉りし頃、其餘材を以て觀音の像七軀を造立し、所々に安置す。當寺の本尊は其一寸八分。然るに上杉謙信此本尊を警の中に收られしが、度々の合戦に勝利あるにより、尊信大方ならず。又謙信旅僧より立像二尺の千手大悲の像を附屬せられたりしにより、先の小像を其佛胎の中に籠られしとなり。往昔佛工定朝、信州善光寺に參籠せし頃、彼寺燒亡す。其時

灰燼の中に、一本の柱燒残りてあり。寺僧に問ば、此柱は蟲喰の柱と稱して、當寺初建建立の時、老翁此木を負來り、西の柱とすゆべしと云ひ終て後、其行方をしらず、然るに件の柱より、夜々光明を放つ中に、蟲食たる跡自然に文字をなせり。

待ちわびて恨むと告げよ皆人のいつをいつとて急がざるらん

とあり、依て蟲食の柱といふと、此柱三度迄燒亡の其火災を除れて、今に存して今又如斯と語りける。然るに其夜寺内の僧徒皆夢みらく、此柱を以て像材とし、佛工定朝をして、觀音二軀を彫刻せしめ、一軀は善光寺にとどめ、一軀は笈に移し奉り、結縁の爲、定朝に自ら背負しめ、諸國を經歷せしむ。故やありけん、上杉家に傳はりてありしを、後當寺に遷し奉るといふ。

花城天満宮

同所南の方にあり。松久寺といへる禪林に安置す。神躰御長三寸八分菅公の御作なり

といへり。相傳ふ、仁和二年菅公四十二歳にならせ給ふ春、除厄の爲に、自彫刻し給へり。十五歳の時御念願成就の爲、造らせ給ふ一寸二分の十一面觀音大士の像を以て腹籠とす。今は別に安置し奉る。又云ふ、此像は延喜元年大宰帥に左遷せられ、彼地に至

松秀寺



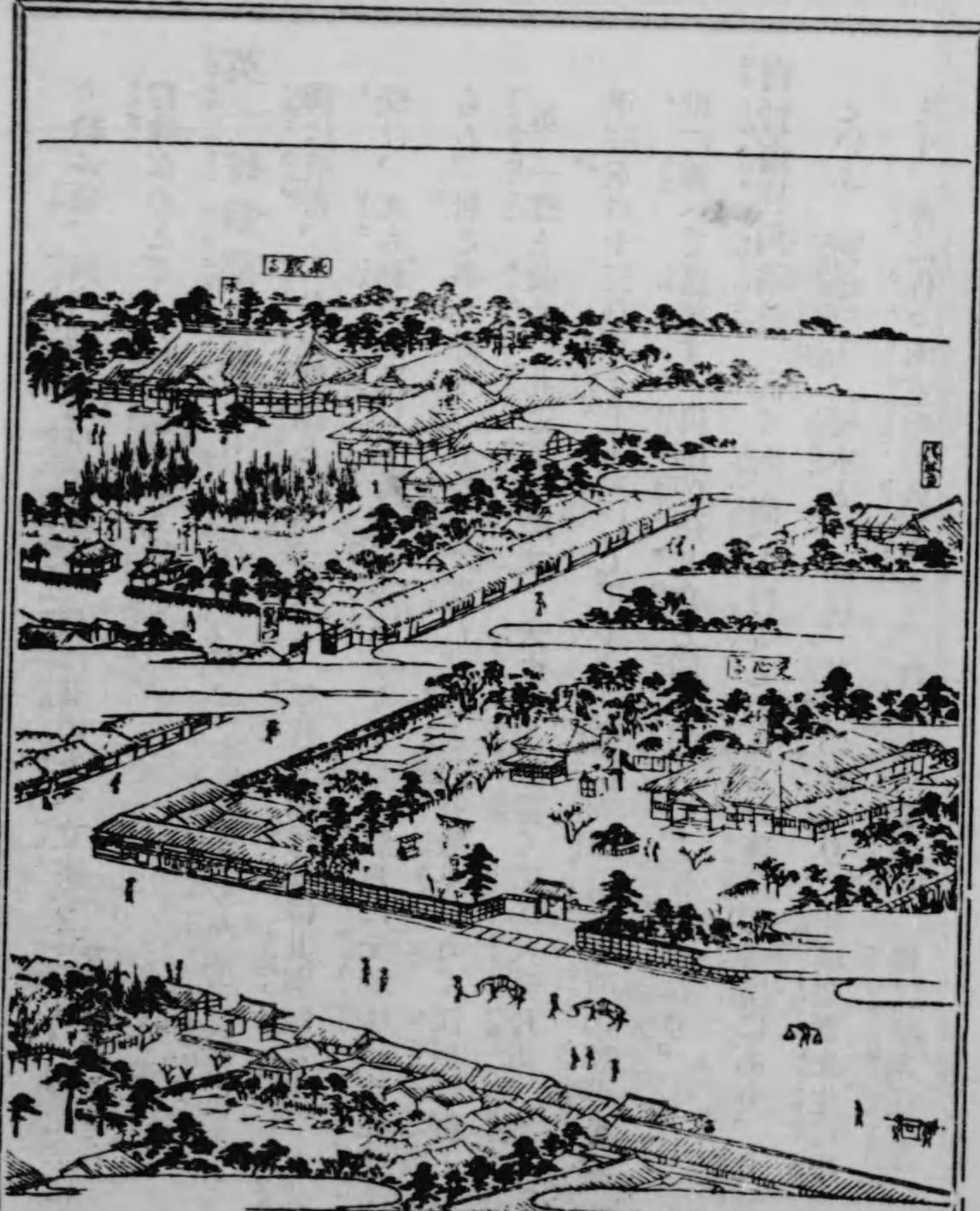
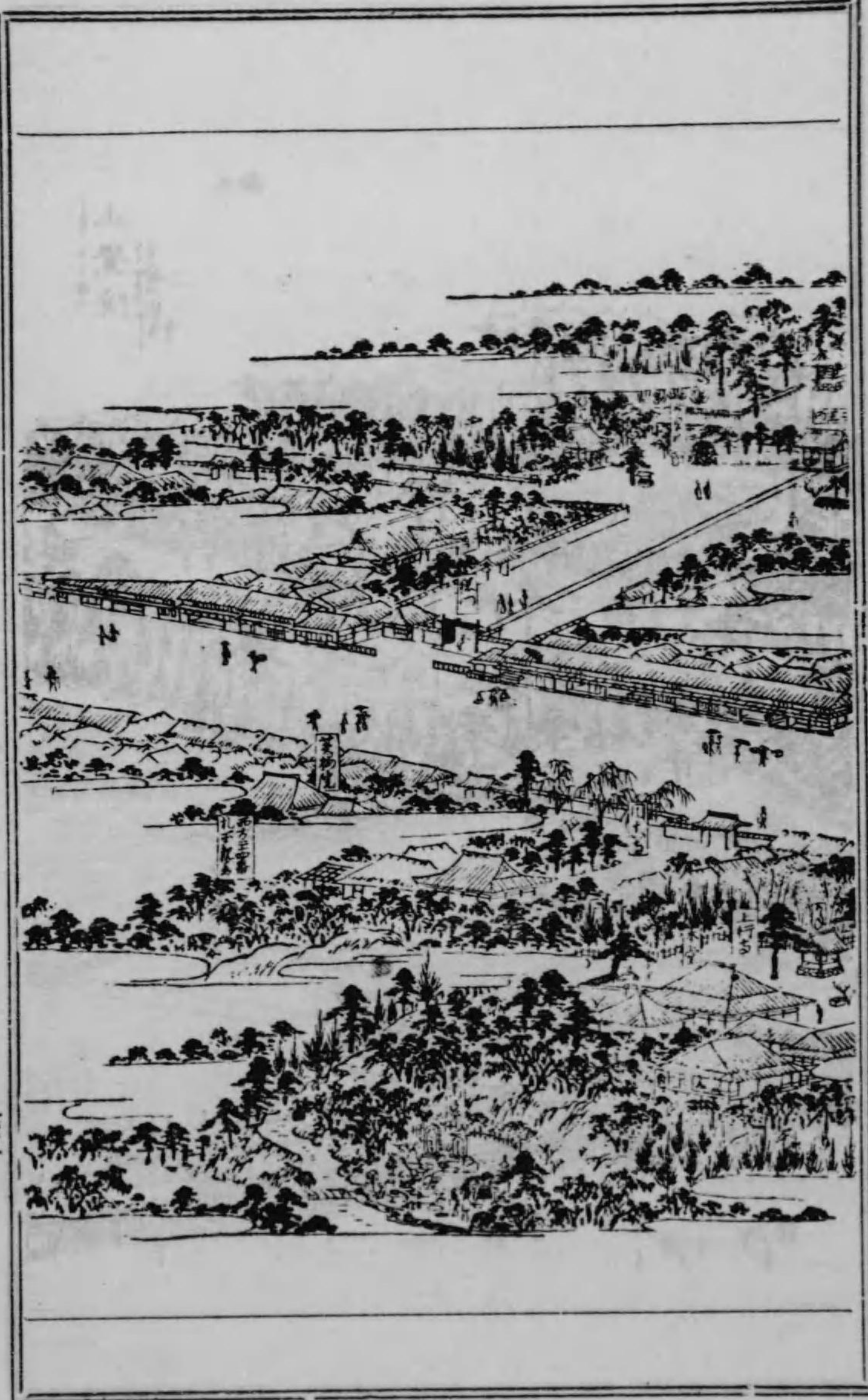
花城天満宮



り給ふ頃、河内國土師里に在す御叔母君の方へ立寄せ給ひ、御記念にとて奉らせられし肖像なりとぞ。文祥の頃加藤家の臣山田氏に於り當寺に安置し奉りけりと云なり。

英一蝶翁墓 同所より二町斗南の方、二本榎の通り左側承教寺にあり。一蝶翁姓は多賀氏、諱は信香、一名を朝湖といふ、曉雲、翠蓑、隣樵等は其別號なり。幼より畫法を狩野安信に受け、尤も新意洒落にして、後一家をなせり。然るに元祿中、事に坐して豆州三宅島に謫せらる。居る事十餘年、其技益進む。寶永己丑赦免ありて江戸に歸る。ことに於て始て名を英一蝶と改め、北窓翁と號す。夫より後は畫く所の尺絹片紙、人争ひ求めて寶とす。享保甲辰正月十三日享年七十三にして卒す。翁生前に作る所の朝妻舟畫讀、及び朝清水記等、世に傳へて賞美す。俳師芭蕉其角と同時の人にして朋友たり。

寶晉齋其角翁墓 同く向側、上行寺といへる日蓮宗の寺境にあり。其角姓は竹下、父を東順といふ。江州堅田の人榎本といふは、其母の姓なり。儒は寬齋先生に學び、詩は大嶺和尚を師とす。書は佐々木玄龍の教を受て、自一家の風あり。醫は草刈氏某に就て術を得、畫は朋



寛心寺
清林寺
兼敬寺
上行寺
圓真寺
黄梅院



友英一蝶に倣ふ。延寶のはじめ、芭蕉翁の門に入りて、俳諧を學び、竟に名をなせり。雷柱子、狂雷堂、有竹居、六藏庵、善哉庵、文庵、及び螺舎、涉川等の數號あり。晉子とは其戲號なるべし。幼稚の頃、お玉が池に住み、後堀江町に移る。又芝の神明町、茅場町等にも庵せる事は、五元集其餘の俳書に見えたり。寶永四年丁亥二月晦日卒す、享年四十七。著る所の俳書凡二十餘部、各世に行はる。

高野山宿寺 正覺院と號す。眞言古義の觸頭なり。世俗高野寺とのみ稱せり。同所南の方一町斗にあり。本尊は弘法大師の像なり。四十二歳に成らせ給ふ時、大師自ら作り給ふと云ふ。門を入りて本堂の右の方に、丹生高野兩神の祠あり。堂前に三結松あり。毎歳三月二十一日御影供を修行せり。

雉子宮 同所猿町の坂口にあり。此邊谷山村の内なり。或官家の書に北品川領大崎云々。慶長の頃御放鷹の時、此社へ雉子一羽飛入たり。其時神名を問せられしに、土民山神の祠なる由申上ければ、已後雉子宮と唱へ申すべき旨上意ありてより、かく號くるといふ。祭禮は毎年九月十五日に執行す。別當は寶塔寺なり。

鳥の跡

雉子の宮にて

かりにくる人も名なしのきじの宮さと遠き野と宿さだむらん 茂 睡

按ずるに、當社は武藏國風土記に、所謂在原神社を云んか。同書に在原神社は祭神天手力雄命にして、天智天皇六年始神禮ありと記せり。當社を山神と稱するは、古へより信州戸隠の御神を祭る故にしかいへるならん。

元三大師堂 同所白雉山寶塔寺といへる天台宗の寺院に安置す。當寺は則ち雉子宮の別當たり。本尊は東叡山の元三大師の畫像と、同筆の眞影にして、靈威照々たり。例月三日開帳あり。此邊を大崎と云ふ。古は海濱にて、此地より東の方品川迄の間、袖の形に似たりとて、袖が崎とも呼べり。

紫雲山瑞聖寺 白銀臺町にあり。黃檗派の禪林にして、寛文年間木庵和尚開基す。鐵牛和尚も當佛殿には釋迦如來、脇士は迦葉、阿難等の像を置きり。毎歳七月十五日大施餓鬼あり。

前銘竝引

武藏州荏原郡三田庄白金村。新開紫雲山瑞聖禪寺。去城二里餘。其



雉の宮



地廣莫。前朝東海。後接日黑。然其所唱始者。青木甲斐守端山居士之
竭力矣。至於山門大殿方丈。及左右大小寮舍。皆端之勸緣而所建立
也。然非夙植大根。安能捨身財之若是哉。茲長松院捐金鑄洪鐘。以鎮
山門。託此勝因。追薦嚴父空印老居士。慈母心光院夫人。以助冥福。而
超妙藥。竝及幽靈村野等魄。特請爲銘。如斯功德。不可思議。卽不辭才
拙。謹爲其銘。

銘曰

須彌作炭。大地爲鐘。鑄出洪鐘。內外空虛。圓音普徧。扣擊聲
舒。聞之發省。妙悟丸祛。幽冥超脫。真性還初。十方法界。同證
無餘。若是功德。至大奚如。存者往者。福寧水於

寬文十一年歲次辛亥孟春穀旦

開山嗣祖沙門木庵瑅謹銘

再鑄銘並引

維時延享二歲次乙丑春二月。罹回祿。堂宇燒燼。洪鐘湧鎔矣。籍是山
僧發志願。募諸方。而今再鑄焉。

銘曰

一火鑄成一巨鐘。斬新禮樂古禪叢。
晨昏扣擊解煩夢。冥苦息除證法空。
教體分明無漸次。音聞清淨爾圓通。
國家悠久民安泰。永鎮山門化令隆。

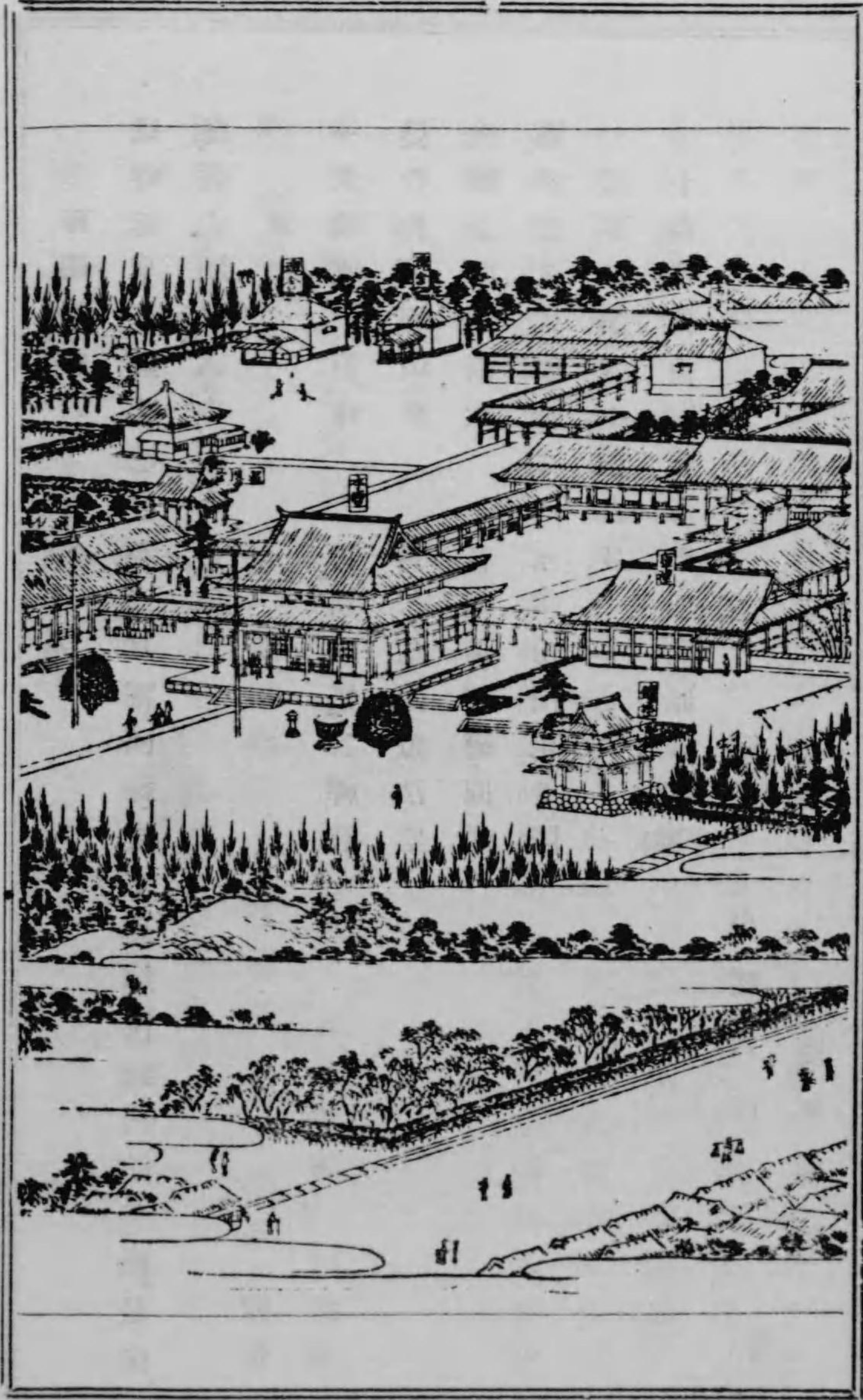
延享二同歲中秋吉旦

十四代住山嗣祖沙門明祖眼謹誌

鑄工

小幡内匠

藤原勝行



佛殿

二重家根の軒に掲
釋迦佛を安ず。臨
濟正徳三十三世眞
隱木庵瑠山僧書と
あり。

額

大雄寶殿

延寶辛酉
吉且開山
木庵瑠山
とあり。

瑞聖寺

軒に掲げ
たり。寛
文辛亥正
月吉日立
開山嗣祖
沙門木庵
書とあり。

天王殿 佛殿の前の方石階
の上にあり。額
内に經山寺
の布袋和尚
及び帝釋四
天王等の像
を置けり。

紫雲山

聯

天王殿の左右の
柱に掲げたり。
木庵瑠山書とし
たり。

聯

同室内の左
右の柱に掲
る。瑠山の書

門開長見江山靜
地務不嬾車馬喧

紫雲堆急現慈宮
瑞聖門中輝妙相

節竿旗

佛殿の前左右に建る。

鐘樓

佛殿の右にあり。
堂中文殊觀音等の
像を安ず。銘文は
木庵和尚撰する所
なり。

鐘樓

開山木
庵書なり

經藏

餘卷を集
め置く。

佛殿の左に並ぶ。内に楞嚴の釋迦如來の像を安ず。瑞聖寺の昔の本尊なり。博士の像もあり。この經藏は延寶八年下谷池端
錦袋置の元祖了翁僧都の建立なり。唐木の一切經を收む。稻葉美濃守正則取寄せらるるところなりといふ。其餘書籍すべて五千

勸學寮

經藏の傍にあり。二間に五間其中五局に備けて一字を建
て。披覽學者の爲に是を置くとなり。

選佛場

同所に並ぶ。内に開山瑠山元禪師の
像を置けり。左右の柱に聯を掲ぐ。木庵
右にあり。

送佛場

軒に掲ぐ
黃檗木庵
書とあり。

聯

當寺三十三
世若冲益書
とあり。

大用現あ時欽山鉄壁以遠色
全杖活表安不生電光怒尾

牌堂額

報恩堂

兼 寮 雲

當寺は寛文十一年辛亥青木 甲斐守 端山居士旨を奉じて、此地に就て一精舎を營む。當寺是
禪本師を請じて開山とす。開堂の日鐵牛和尚をして首座とし、乘拂提唱せしむ。甲寅秋黃檗

白銀妙見堂
しろぎんみょうけんどう



鎌作觀音



和尚再び瑞聖に住み、師に命じて分座説法、人天悦服す。乙卯三月和尚の旨を奉じ、師を以て紫雲の繼席とす。遠近の道俗來て戒を求る者、指を屈するにたへず。丁巳春大清の主左都督揚大紳師の道化を慕ひ、三章を贈る。其一に曰、臨濟正宗三十三世、其僧明溪が五百大阿羅漢の像五十餘幅、ならびに師の肖像を畫く。今猶鎮守の寶とす。當寺は本山の光景を摸擬する所にして、其經營頗る他に異なり。江戸黄檗宗最初創建の伽藍なり。

妙見大菩薩 同所三町斗西の方、道より左側、日蓮宗妙圓寺にあり。足利將軍尊氏公の念持佛なりといへり。

鎌作觀世音 同く西の方一町半斗、向側六軒茶屋町の角、眞言宗光雲寺にあり。相傳ふ、神龜年間行基菩薩諸國遊化の頃、信州更級に始て掛錫し給ふに、平山と云ふ所の池中より、此本尊出現あり。又空中より化人あらはれ、鎌と御衣等を持て降臨し給ひ、彼觀音の尊像を彫刻し、行基に授け給ふ。此本尊是なり。

誕生八幡宮 同所同じ側一町斗を隔つて、永峯町にあり。文明の頃、筑前宇美の地より勸請



夕日岡
行人坂



富士見茶亭
西南邊(西の南の邊)にありて
けく芙蓉の白
峯を望む風
雲と掃くは
玄冬の色と
あはれ
然として又姿を
失ふり頂更ほ
定るなり
一と其觀を
攻む実よ
註景あり



音のる
ゆと
とぬりと
ゆ
杭音





太鼓橋



す。祭る所の神は、神功皇后一座なり。本地佛は別當は眞言宗高福院と號す。八月十五日を祭祀の辰とす。

行人坂 同所同西の方、目黒へ下る坂を云ふ。寛永の頃、湯殿山の行者某、大日如來の堂を建立し大圓寺と號す。此寺今は亡びたり。

般若塚 同坂のなかば道の側あり。延享三年松山清林院の木食心譽一進和尚、往來の大地成を焼く爲にとて、般若心經三千卷を書寫ありて、此地中に埋藏せられし所の碑なり。

五百阿羅漢石像 同道の左にあり。明和九年壬辰三月二十八日二十九日兩日の大火に燒死せし者の迷魂を甲はんが爲、ある人は是を建立すと云へり。

松樹山明王院 同所坂の側にあり。天台宗にして、東叡山に屬す。本尊阿彌陀如來、脇士觀音勢至を安置せり。開山を榮運法師といふ。常念佛の道場にして頗る殊勝なり。毎月四日報恩念佛百萬遍修行あり。此常念佛は西連といへる。沙門の發願なりとす。

子安觀世音 弘法大師の作にして、長州禮浦出現の靈像なり。元祿元年六十六部納經の修行者冥佛たりしを、靈夢を感ずるの後、永子安觀世音と當寺に止め奉りしとぞ。女人難産を救ひ給ふとて、當寺より祓符を出せり。また什寶に子安石と云ふあり。當寺主仙順といへる沙門、信州作久郡三縣村より感得せりと云ふ。

辨財天祠 同境内にあり。本尊は弘法大師の作にして、江州竹生島辨天のつげによりて彫刻ありし靈像なりといふ。

夕日の岡 明王院の後の方、西に向へる岡をいへり。古は楓樹數株梢を交へ、晩秋の頃は紅葉夕日に映じ、奇觀たりしとなり。されど今は楓樹少く、只名のみを存せり。

大鼓橋 同所坂下の小川に架せり。目黒川と柱を用ひず、兩岸より石を疊み出して橋とす。故に横面より是を望めば、大鼓の胴に髣髴たり。故に世俗しか號く。享保の末、木食上人譽心を製するとなり。

靈雲山蟠龍寺 安養院と號す。同所橋より一町ばかり西南道より右にあり。淨土律にして、縁山に屬せり。本尊阿彌陀如來は、慈覺大師の作なり。開山は吟蓮社龍譽一雨靈雲和尚と號す。

上野國新田の大光院より退隱 境内に丈六の阿彌陀如來の銅像あり。又後の方山崖の下に岩窟ありて、中に辨財天を安置す。弘法大師の作。本宮は門の向にあり。惣門の額に安養院と書せしは、

黃髮獨湛和尚の筆なり。

臥龍山安養院 能仁寺と號す。同所にあり。天台宗にして瀧泉寺に屬せり。本尊涅槃釋迦像は、空譽上人の作なり。當寺は法華讀誦稱名念佛の道場なり。



蘇摩也堂



蛸薬師如來 同所町家の巽の隅にあり。天台宗成就院境内に安ず。本尊薬師如來は慈覺大師の作なり。世俗傳へ云ふ、此本尊に祈願ある者は、蛸を断て是を念するに、果して利益ありとて、繪馬にも蛸の形を畫きて捧ぐ。

目黒不動堂 同所の西百歩のあまりにあり。泰叡山瀧泉寺と號す。天台宗にして、東叡山に屬せり。開山は慈覺大師、中興は慈海僧正なり。

本堂不動明王、慈覺大師の作、脇土は八大童子なり。

本殿額 山 後西院御筆 樓門額 山 後水尾帝御筆 鳥井額 山 日光御門主明王院宮御筆

經藏 一代藏經を安置す。本尊に 釋迦阿彌迦葉の像を置く。八幡宮早尾權現 祭神猿田彦大神、或は素戔嗚尊ともいふ。祭禮は 此堂社何れも本堂の左に並び、 惠比須大黒祠

鐘樓 水神宮 愛染明王 大行事權現 此地の地主神なり。祭神高皇産 石不動 何れも本堂の右にあり。稻荷祠 地藏尊

草善堂 聖觀 音開山堂 聖德太子 天照太神宮 本地大日如來 本堂の後待たる山の腰を切割り、 吉祥童子を置く。

天女祠 天満宮 鬼子母神十羅刹女祠 虚空藏堂 遮軍神祠 何れも本堂の後 結神祠 役小角 女坂

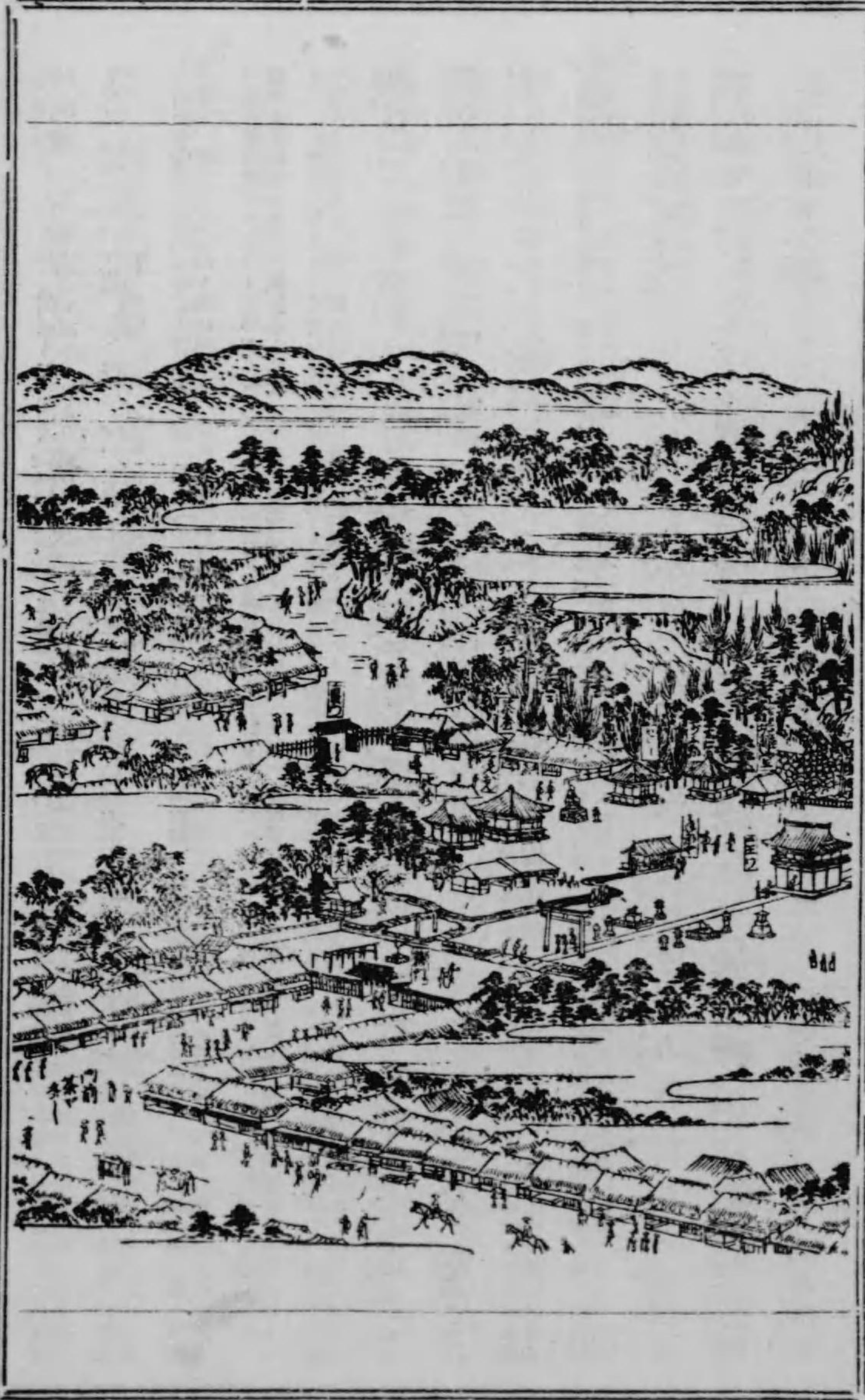
程にあり、銅像にし。彌陀、藥師、釋迦 子安明神 鬼子母 疱瘡神 粟島明神 石地藏尊 秋葉權現 六

鮎薬師堂



同業
此地の名物
是と商ふ
おとく
土産





目黒
不動堂



所明神 荒神宮 何れも二王門入 辨財天祠 江島辨天の 堂内繪王脱衣變くわんおんだう 中尊は聖觀音通りに西頭坂
 を安置 勢至堂 稻荷祠 前不動 何れも樓門の左の方にあり 樓門 左右に金剛寶迹二王の像を置 獨鈷の瀧 也 當山の垢離場
 十四年當寺開山慈覺大師、入唐歸朝の後、關東へ下り給ひし頃、此地に至り獨鈷鉢をもて此地を穿ち得給ふとぞ、常に觀泉沼々として
 落つ、炎天早懸と雖も濁る事なく、末は目黒一村の水田に引き用るといへり、昔は三口に別れて涌出せしが、今は二流となれり、その
 かみ一年此瀧水の濁たりし事ありたるが、沙門某江島の辨天に祈願し奉り再び元の如しとぞ、故に今も年々 鷹居の松 又鷹居松とも
 當寺より江島の辨天へ衆僧をして參詣せしむる事怠慢なしといへり、和漢三才圖會に、俱梨迦羅の權とあり、鷹居の松 又鷹居松とも
 なづく、石階の下にありて蒼々たり、寛永の頃、大樹此地に御遊獵ありし時、其御鷹をれて行方をしらす、依て別當寶榮に仰
 の旨ありて祈念せしむ、然るに忽ち御鷹飛歸り此松にとどまれり、依て御感なくめならず、此樹に鷹居松の名を賜ふといへり。
 縁起に云ふ、平城帝の大同三年、慈覺大師本國下野國より叡山に赴き給ふ頃、此地に投宿あり。
 然るに其夜の夢中、明王靈示ありて、永く此地に跡を垂れ、群生を度せんと曰ふとみて覺たり。
 翌日夢中拜する所の尊容を模して今の本尊を彫刻し當山に安置したまふ。
 或人云ふ此地は日本武尊 經歴の頃、不動尊の像を彫刻して神跡に擬せらる。其故に日本武尊駿河に狩し給ふ時、凶徒放火して尊を襲ふ、其時尊の佩き給へる紫雲
 の劍を抜て狩犬の綱を切て放ち燃來る草を薙拂ひ給ふ、尊其火の中に立せ給ふ形相さも明王の形に似たるを以てこれに比せしとぞ、犬を
 當山の使者とするも此故なりと雖も此説未だ考へず、しかありしより千歳の今に及ぶ迄、理智圓明の威力廣大にして、迦樓羅
 焔の徳用深妙なり。 元和元年の春此地の在家より火出で餘燭燭室に覆ひし時、本尊みづから猛火を除外給ひ、燭の下に此地
 は遙に都下を離るといへども、詣人常に絶ず。 殊更正五九の月二十八日前日より終夜群參
 して甚賑へり。又十二月十三日は煤拂にて開帳あり。是も前夜より參詣群をなせり。門前
 五六町が間、左右貨食店軒端をつどへて、詣人をいこはしむ。栗餅、飴、および餅花のたくひ
 を鬻ぐ家多し。

虚無僧寺 同所門前大路の西にあり。普化宗金洗派にして、東昌寺と號す。控番所と稱して、本
 寺にはあらず。或は風呂屋ともいふ。 金洗派、括體派、西向派、安樂派、水戸八箇寺などいふあり。當寺の番所と唱ふる
 雍州府志に、虚無空寂を宗とす、故に虚無僧と稱す。又薦僧とも書り。意は其徒常に風喰、
 露宿、險難を厭はず、諸方を經歷し、至る所筵薦に座して足れりとす、仍て薦僧とも云ふ。
 中世暮露と云ふあり、職人盡歌合にむまひじりともあり。 洛の妙安寺に朗庵といへる異僧あり、雲野の一休和
 風穴演詩の作略を基ひしなり。始め宇治の吸江庵に住す、世に云ふ所の虚無僧の本寺なり。凡そ東國西州風穴道人の門派所々にあり。
 一説に普化和尚の流派といへども、風穴の事は取るに足れりとあり。明惠上人の草袋をちびに兼好法師のつれづれ草等にも出たり
 大鳥大明神社 同所不動尊より北の方、二町ばかりを隔つ。別當は天台宗にして、大聖院と
 號す。祭神日本武尊一座なり。相傳ふ、大同元年丙戌、泉州大鳥の御神を勸請し奉ると
 ぞ。當社は目黒村の鎮守にして、祭禮は五月と九月の九日を例とす。此日角力興行あり。



大鳥明神社



金毘羅社



按ずるに、目黒不動尊に日本武尊の説を交へしは、此社を誤りて云ふならん歟。不動尊の條下と合せてみるべし。附ていふ、此邊をすべて目黒となづけ、上中下とわかれて廣曠の地なり。永祿二年小田原北條家の所領後報に、太田源七郎、島津孫四郎等此地を領するよし記せり。東鑑に、建久元年十一月七日の條下に、目黒彌五郎と云へる名を載せたり此地より出たる人なるべし。

金毘羅大権現社 同所二町ばかり西の方、通を隔てゝあり。祭る所讚州象頭山金毘羅神と同じ。當社を以て、御城南鎮護神と稱し奉れり。九條家染筆の額を藏す。別當は禪宗にして、

高幢寺といふ。境内に難波の梅、又會根の松と稱する樹あり。

千代ヶ崎 澁谷宮益町より、目黒長泉律院へ行く道の傍、芝生の岡をいふ。佳景の地にして、永峰に屬せり。絶景觀といふは、松平主殿侯の別莊の號にして、閑寂無爲、自然に其地に應ず。

高峰山長泉律院 同所六町ばかり西の方にあり。淨土宗にして、縁山に屬す。則ち縁山前

大僧正 成譽大立和尚を開創の主とし、不能律師第二世たり。第三世を徳門和尚とす。師の育

世の時弟子惠影影造する所なりといへり。

本堂 山の半腹にありて丈室を去る事數十間の回廊を築。本尊は上品上生の阿彌陀如來なり。坐像四尺餘、慈覺大師の作、泉州堺の心運寺

より翻け得て修飾を加へ、以て當寺の供像とす。經藏 門を入て左にあり。安永七年戊戌落成す。鐘樓 安永元年徳門師建立し

は寶曆十一年辛巳縁山前大僧正和尚といふ。久く律院を創起するの志ありといへども、新に寺

を開創する事は、官より禁とす、故にいまだ事ならず、不能律師に至り營繕既になると、大立大僧正示

寂あり。依て師の遺志を奉じ、法弟千如等百計千慮してこれを企つ。川越蓮馨寺主教意上人力

を戮せ扶成す。再び官に告て、所請に準する事を得て創建落成す。號けて長泉院と云ふ。山間

清泉涌出して境内を繞り流る。扶費の施主北川氏某なり。こよに於て寶曆十三年の夏、千如等徳門師を

請じて、當寺に住持たらしむ。徳門律師行狀記に云く、師諱は普寂字は徳門自ら道光と號す、勢州桑名縣増田邑に誕す、

なす、常兄に異にして名繼の相あり。三歳字を讀り六歳書を讀む、凡そ授る所の經書ひとたび受れば輒ち記す、年をこえて師の學徳既に

世にみづ、しかれども三衣一鉢纒に唯身を掩ふのみ、一錢一米もとより蓄ふる所にあらず。竟に天明元年辛丑十月十四日化寂す、閱世七十

五臘夏三十六、其徳化はあまねく世にしる所なれば是を略す。又師生平撰述の書甚多く、

當寺は常行念佛の道場にして、浙々たる松風は、とこしなへに梵唄の聲を助け、去此不遠

の秋の月は、長泉の流にやどる。實に清淨無塵の淨刹にして、常に寥寂たり。

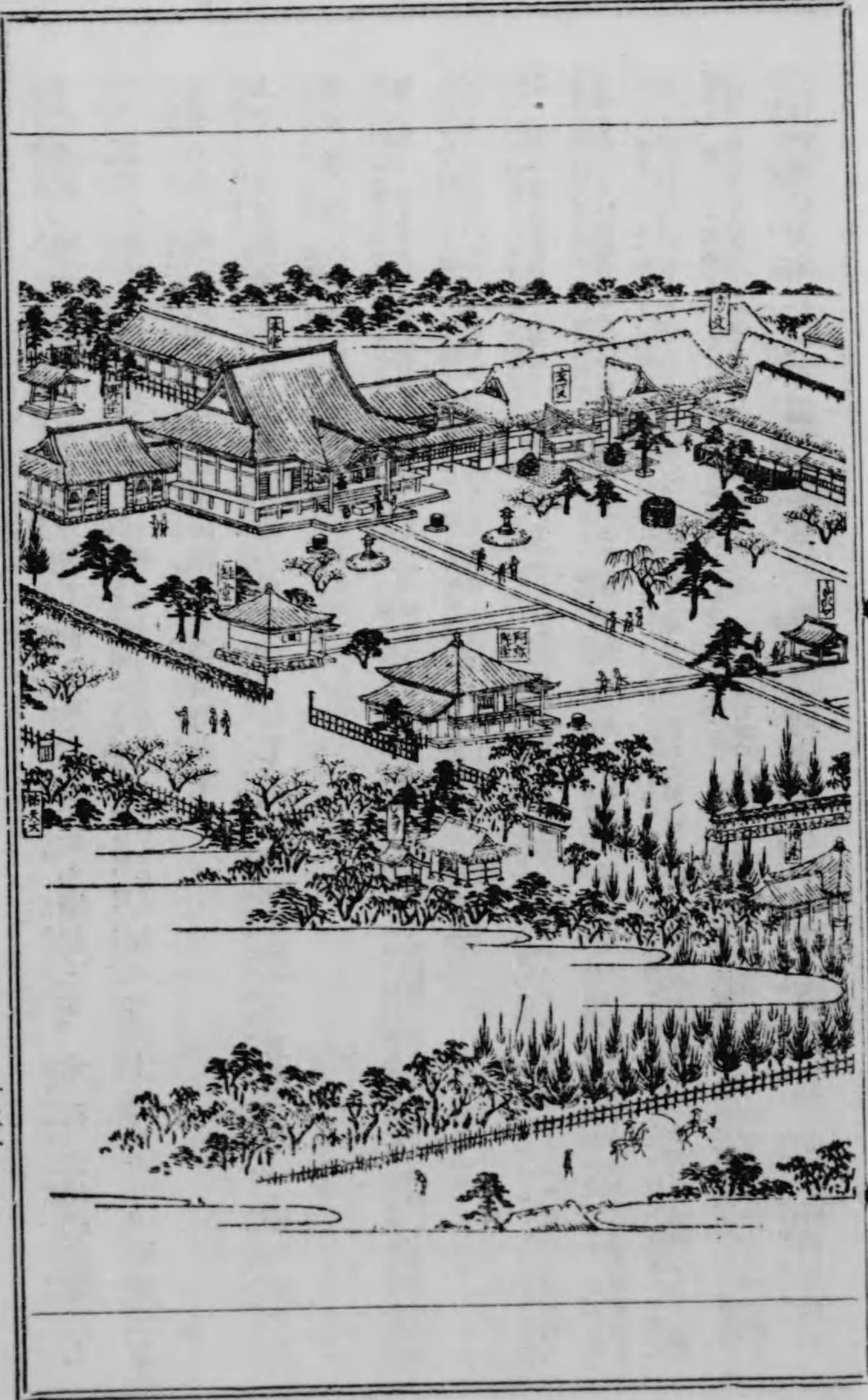
明顯山祐天寺 同所西の方五町斗を隔つ。善久院と號す。享保年間二世祐海和尚、祐天大僧

子代、
 行人坂の北、
 主殿、
 自、
 たり、
 し、
 梅、
 信、
 氣、
 張、
 扱、
 親、
 此、
 あり

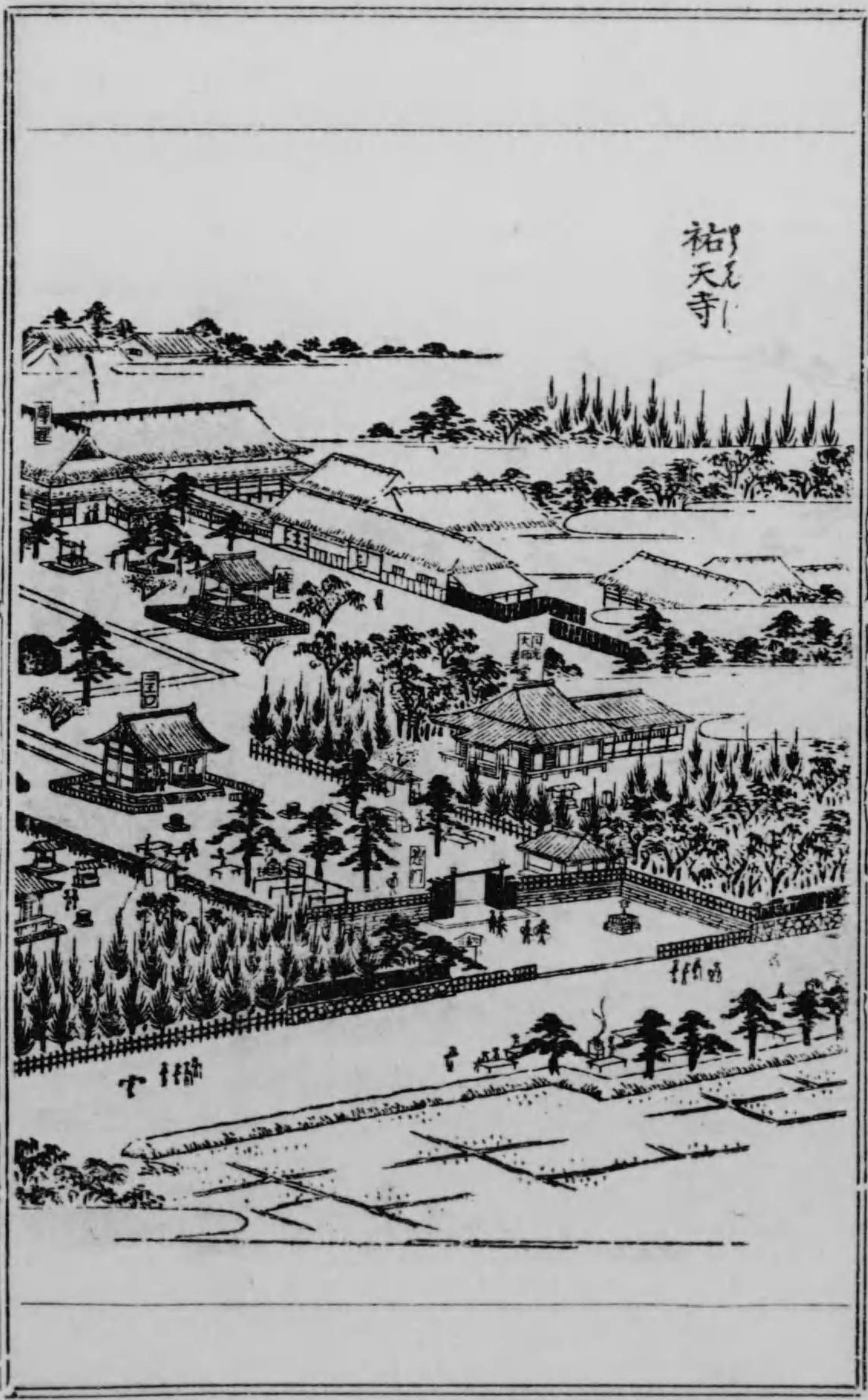


長泉律院
チシキウケン





祐天寺



正の遺跡の地を奉じて、當寺を草創し、則ち祐天大僧正を開祖とす。常行念佛の道場にして、鉦鼓の聲は山林に鎗符せり。此稱名は開山祐天大僧正臨終の期、開ありしより連綿として絶えずとなり。毎年七月十六日より、同廿五日に至る迄の間、阿彌陀經千部讀誦修行、道俗群參す。

本堂 本尊阿彌陀如來 御長一尺 惠心僧都の作にして、開山生涯持念の尊像なり。開山祐天大僧正眞像 本尊の藏前に安置す、半身佛にして、八十二歳の彫像三輪利鏝の作なり。

鐘 堂前右の方庫裡の前にあり。圓光大師堂 同下並びにあり、法然上人御在世の時、河内國に天野四郎と云ふ強盜ありしが、常に上人の御もとに隨從して教化に預りしが、後上人相模國川村と云ふ處へ下向の頃生涯の御記念にとて自ら彫造して送り給はりし彫像なりとぞ、故ありて當時にうつしまるるといふ。

經藏 堂前左の方にあり。阿彌陀堂 都一代彫刻の如來は此尊像を拜して彫り給ふが故に此號ありと云ふ。開山大僧正常記有僧の輩に淨業傳法の時の傳授佛なりと縁起にあり。稻荷祠 同並びにあり。當寺の地蔵堂 正の本地佛と稱しまるらる。惠心僧都の作にして、御長二尺五寸あり、元信州松本の光明院に安置せしに、寛永十四年丁丑四月四日開山大僧正誕生の日より失せ給ひ、享保三年戊戌七月十五日開山遷化の日に至り、此尊像再び光明院へ歸り願れ給ふ。松本の城主出羽守水野忠周侯の夢中開山の本地は地藏尊なるよし示あり、依て自ら其事を筆して、當寺第二世祐海上人へ申送らせられたり。其書簡今當寺に傳へて秘藏す、然るに寛政九年丁巳の夏松本の城下倉品七郎右衛門といふ人、從來の因縁あるを以て、後の城主丹波守松平光行侯へ乞ひ、同年十二月二十三日當寺へうつし奉りぬ。

二王門表の左右には、那羅延、密迹の二像、裏は持國、廣目の二天を置く。額 山 祐海和尚の

筆開山祐天大僧正廟 方叢林の中にあり、入口に石地藏あり。

開山八十歳影像 麻布一本松の禪室にして、了同 臨終眞影 開山八十二歳の時、享保三年戊戌六月中旬より不食して身體日倚りて移して諸人に拜せしむ。此期に 開山遺骨舍利 開山命終の後荼毘せしに全身悉く舍利となる。多くは廟穴 是も寫せし影にして、了同和尚の畫なり。 開山遺骨舍利 埋藏す今わづかに寶塔へ收むるもの則ち諸人に拜せしむ。同舌根 舌根の中に宛然として殘れりといふ。縁起に云ふ、舌根は元火にして茶毘の中に壞せざと云ふ。 開山大僧正書寫六字名號 多し、就中劍難七太刀身代名號、狼牙密名號、火中出現不燒名號、痘瘡守名號、等の現益は普く世にしるす所也。故にしげきをいとひて寺記にゆづりてこゝにのせす、猶其餘の名號奇特尤も多し。

開山大僧正長悦像 開山小石川の傳通院在任の時、元禄年中大將軍家御前にあいて法開說法ありしを、瑞春院殿御感賞の餘につらねさせ給ひしを、其後祐海上人へ賜りて當寺に 蜀江錦九條袈裟 増上寺在任の時、開山上人女院御所へ御血脈御 累濟度收む此故に毎年三月當寺にて難祭の儀式執行事あり。

如法衣 二十五條なり。累カサネは下總國岡田郡羽生村與右衛門といひしもの妻なり、顔形類少き惡女にて心さへにかたましかりしといへるに罪りしが、其後妻五人迄累が怨念によりて任死し、猶六人目の妻の娘菊といへるを憐せしが、開山大僧正の化益により、寛文十二年壬子三月十日の夜に至り累が二十六年の怨執悉く散して、生死解脱の本願を遂せし事、普く世に知る所なり。猶委くは解脱物語といへる草紙に見 開山明蓮社顯譽上人 愚心と 祐天大僧正は、奥州岩城郡新妻邑の産なり。西村善内といふ者の幼名三之助と云ふ。檀通和尚に従ひ縁山に修學す。世に知る所の累が怨靈解脱の譽は尤も著し。

此事は師の歳三十六其頃檀通師に従ひ北總飯沼に在住し、のち後故ありて武州牛島に潛居す。道俗化を蒙る者夥し。給へる時の現益なり。怨靈解脱物語といへる草紙に詳なり。後故ありて武州牛島に潛居す。道俗化を蒙る者夥し。



碑文谷
法華寺



元祿十二年己卯 台命に依て下總生實の大巖寺に住持し、牛島の庵室より直に大巖寺に
飯沼の弘經寺に轉じ、紫袍を賜ふ。又辛未江戸小石川の傳通院に移り、正徳元年増上寺に住
せらる。大僧正に任ぜらる縁のちめがら 後目黒の地へ隠栖せられ、竟に享保三年戊戌七月十五日化寂あり。

當寺は則ち祐天大いっせ 一世の行狀竝に書寫し給ふ所の名號の奇特は、世人普く知る所なり。開山臨終の頃まで
僧正終焉の地なり。開山云く惠心僧都は一期の間如來を彫造し其中にして往生を遂げられたり、我
も又彌陀の名號を書寫して、其中に往生すべしとて、命終の日に至る迄一日も怠る事なかりしなり。

妙法山法華寺 碑文谷にあり。祐天寺の南半道斗にあり。吉祥院と號す。天台宗にして東

叡山に屬す。本堂本尊は釋迦如來、脇士は、文殊普賢なり。里話に、今存する所の堂宇は飛

觀音堂の立像にして、參籠の人此堂に通夜す。榎木 寺開創已來のものなりとてその本に垣を築す。一二王門金剛密迹の

二像は、佛工安阿彌の作なりといへり。豐成尤も著しきが故に世人尊信す、いかなる故にや寛政紀元の年己酉の頃よ

事止みたり。當寺其先は慈覺大師の開創にして、天台宗の古刹なりしが、後日蓮の宗化に歸し、

日源上人中興開基たり。竟に元祿に至り舊慣に復し、元の天台宗を唱ふ。今堀内妙法寺に安置せし日

へり。境内櫻楓の二樹多く、春秋共に頗る壯觀たり。

碑文谷八幡宮 同所耕田を隔て、南の方一町斗にあり。相傳ふ、島山重忠の崇信せし御神

なりといふ。神體は秘物なりと云ふ、或は

別當は天台宗にして、法華寺末神宮院奉祀たり。昔は此地の農民の内官氏なる人社司たりしとなり、此官氏は重

は、往古の鎌倉街道にして、路の傍に石碑ありしとなり、されどもいかなる故にや此地の土民鎮守八幡宮の社地へ埋藏したりと。或は日原上

人大卒都婆に碑文を書して埋めし故の名なりといへり。又江戸鹿子(エドカノコ)といへる草紙には、忠玄といへる沙門、卒都婆一基を

建てたるに上りてかく唱ふるも

ありて共に詳なる事を得ず。

九品山淨眞寺 碑文谷より一里あまりを隔て、西南の方奥澤村にあり。淨土宗にして唯在

念佛院と號す。京師知恩院 延寶六年戊午、珂碩和尚開基する所の淨刹にして、九品九會の靈場

たり。

本堂 本尊阿彌陀如來 丈六の 額 當寺珂慶上人筆 内佛本尊阿彌陀如來像 聖徳太子四十二歳の災

難を除かん爲彫造ありしとなり、珂碩上人御年十八の時、深川靈岸寺の傍に庵室を結び念佛修行なし給ふ頃、ある時一人の高僧此本尊を背

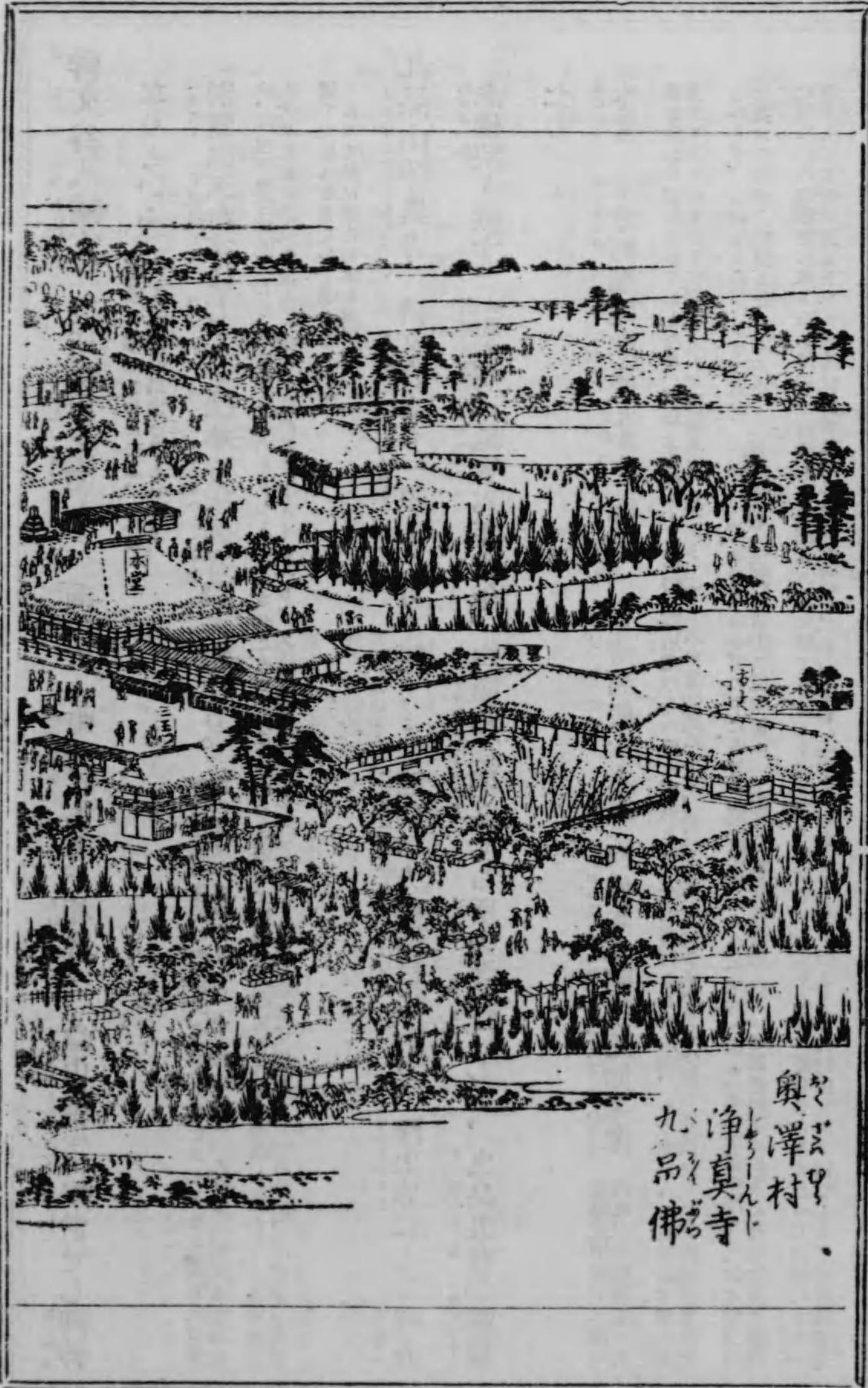
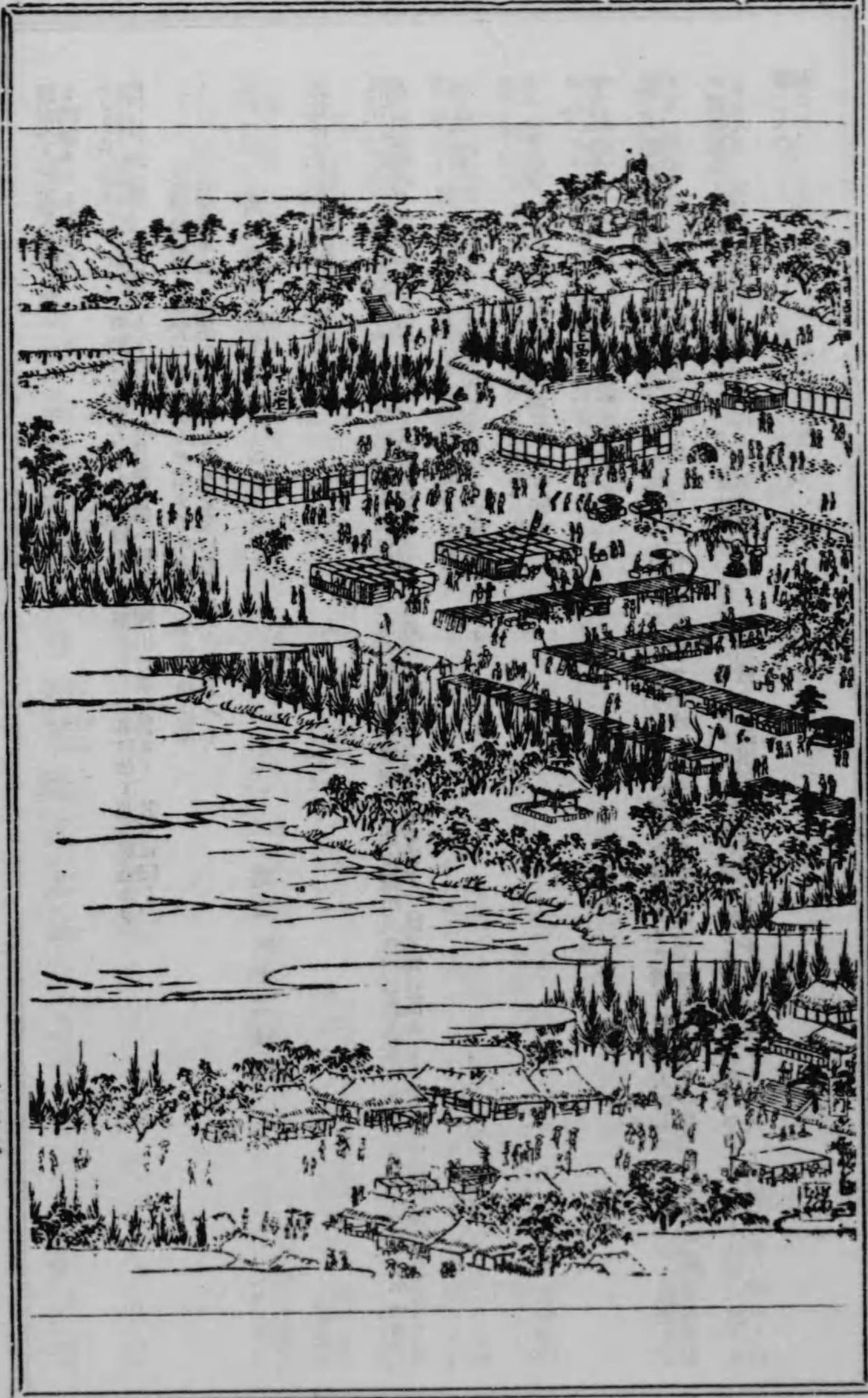
負來て其來由を示して珂碩上人に附屬あり、夫よりして上人の智徳盛にして、貴賤の道俗利益を蒙る者少からず、故に九品佛彫造の資財乏

しからず、比靈像の助により諸佛天 地藏尊 本堂の向小堂の中に安置す開山珂碩上人の本地佛と稱す、惠心僧都の作なり、此本尊昔丹

三萬六千體悉く成就したりといふ。波瀾並浪山に立せ給ふ、其體に住む大江繁時といへる惡逆無道の野人一時山に至り急雨

に逢ひ件の地藏堂に休らひし時、堂宇破壊し佛體雨露の爲に浸され給ふを憐み奉り自冠る所の笠を本尊に覆ひまゐらせたりし因縁により一

度死して冥府に至るといへども此靈像繁時の苦に代り給ひ、再び發渡へ歸らしむとなり。其後故ありて高野山に移り給ひしを可山法印當寺



奥澤村
 浄真寺
 九品佛

開山上人の道光を基ひ是を附屬ありしとなり

開山珂碩上人像

客殿に安置す、上人生前如來の顯示再三なるに依て是を彫造ありしとなり。此像に添へ置れし開山自筆の書あり。其文に曰く、

此像は如來の御告三度に依て彫刻する所なり、未代の輩此像に結縁せば、現生の諸災難を除き未來は必ず淨土に趣くべし。

萬治元年戊戌七月二十四日

珂碩四十二歳印

此故に世人除厄の影像と稱せり。

曼陀羅堂

本堂の左にあり。中尊は弘法大師の作の三尊の彌陀像を安置す。往古深川大島村の念佛堂にありしを堂守淨性といへる。沙門當寺へ移し奉る。其餘五智如來及び超越永劫佛五劫思惟佛等を安置す。此尊像は面よくらかにして他の像に異なり。

中品堂

同じ右に並び、中品中生、中品上生、中品下生、以上三品の阿彌陀如來の像を安置す。

上品堂

本堂に向ふ、上品中生、上品上生、上品下生、以上三品の阿彌陀如來を安置す。

下品堂

同左に並び、下品中生、下品上生、下品下生、以上三品の阿彌陀如來を安置す。

以上九品の阿彌陀如來九體を安置す、各坐像にして、一丈六尺あり、佛像一體毎に圓光ありて附する所の小佛一千一編づつ九體共にしかり。何れも開山珂碩上人の彫造にして開山常に一日三錢を貯へ、活佛の費に充つ。寛文四年より同七年に至り其間わづかに四年、竟に九品の彌陀像全く成就する事を得たりとなり。此本尊初は豐岸寺の地にありしが、洪波の爲に破らる。後延寶六年戊午ことんく此地に移さるるとなり。或は云ふ珂碩上人諸堂不成して遷化せらる。從弟珂碩上人河州玉手山安禪寺より來りて建立すといふ。九品堂の額は何れも珂碩上人の筆なり。

開山堂

上品堂のうしろ古城の跡、堤の上にあり、開山珂碩上人七十二歳の影像なり。

開山珂碩上人廟

開山堂の右のつぎにあり。奥の院と唱ふ、近頃石の扉を造り設く。星の井 開山廟の前小坂の上にあり、有信の人偏に稱名すれば、しゅうり、白日といへども、水底に衆星の光り顯はるるといへり。鐘樓

樓門

同じ所にあり、樓上には二十五菩薩の像を安置す。樓下には金剛密迹の二王の木像を置けり。

芝枯大名號一幅

長十三間巾九尺白布十反を合せ用ゆ。珂碩上人の筆なり。草木國土悉皆成佛の意地に住して書かれし故に、草木に掛れば大字の通り芝枯る故に名とす。

額場 當寺珂慶和尚筆

芝枯大名號一幅の意地に住して書かれし故に、草木に掛れば大字の通り芝枯る故に名とす。

阿彌陀如來畫像

以て如來の御姿を書きつめられし像なり。十念名號 珂碩上人臨終の頃筆せられたりといふ。徒弟の輩阿彌陀如來の畫像にして、細字の大字名號を、

亡者の帷子

昔芝西應寺町鳥羽屋三郎左衛門なりける人の妻、難産にて死たりし後、珂碩上人の十念願符を授け、其餘高徳の亡者の帷子、

攝待大茶釜

千部の時出し此茶釜に、

南無阿彌陀佛

奉寄附罐子一口。爲二親菩提。于時寛文八年霜

月廿五日。當九百日。武州豐島郡葛西莊大島村。念佛堂常住物沙彌

より、報恩の爲宮本仁左衛門寄附なしたりとより、來由は寺記に詳なり、其銘に曰く、

淨性。施主山城國宇治里宮本仁左衛門。鑄物師釜屋八右衛門。

開山大蓮社超譽上人珂碩和尚は松露と號す。俗姓は野村氏、武州の人なり。元和四年戊午正月

月元日に生る。江戸覺眞寺の圓岩に投じて難染し、十八歳にて業を珂山和尚に受く。珂山和尚

賢大嚴寺に住す。和尚後年武陵の靈嚴寺に住持する頃、師も亦從つてかしこに移る。初越後國泰叟寺に

住し、後此地の郷民の招に應じ、歳七十七の時、武州に歸り、世田谷奥澤に幽棲す。當寺是

遂に元祿七年甲戌十月七日化寂す。本朝淨土高僧傳に、元祿八年報壽八、師の姿貌溫雅にして慈恩尤も

深く、奇驗孔多し。凡そ在世の感應は勝數すべからず。其事最も煥灼として、人々是を傳

ふ。以上淨土傳靈系圖、上人傳、本朝淨土高僧傳の意を採る。

當寺は不斷念佛の道場にして、閑寂玄隱の淨舍なり。毎年四月三日より、同十二日に至る迄

十日の間、阿彌陀經千部讀誦修行、七月十六日より、同十八日迄蟲拂にて、當寺什寶を出し

諸人に拜せしむ。此寺境内は昔小田原北條家の屬將、吉良家の老臣、大平佐馬守とも、とい

ひし人の構たりし畢隍の舊跡なりとて、今も北より西南の方へ繞りて、堤の形、空堀の跡を

存す。後門の方は大沼にてありしとなり。今は耕田となれり。

大平山 奥澤新田村にあり。大平出羽守の岩の跡なりといへり。

按ずるに、等々力村満願寺所藏の天文弘治の古文書に、大平清九郎といへる名往々に見えたり。大平左馬と云ふも此人の事ならんか。

致航山満願寺 二子街道等々力村道より右にあり。新義の眞言宗にして、山城醍醐報恩院に

屬す。開創の時世詳ならず。中興開基を定榮法印と號す。慶安年間寺領御寄附の朱章を賜ふ。

本尊は大日如來なり。當寺は世田ヶ谷の吉良左兵衛佐源頼康の祈願所にして、其頃は頗る盛

大の寺院なりしとなり。世田ヶ谷私記追加に云ふ、當時往古政忠の男經辨住職す、桑徳寺所藏の吉良系圖にも政忠の子經辨満願

寺とあり、當寺に天文弘治天正等の年號ある、吉良頼康、北條氏康、氏政等の體狀、或は書簡等ナベ

て十八通あり、其文中に世田ヶ谷深澤村の満願寺とあるは其故をしらず、昔等々力は深澤に屬したる小名にてありしか、又は深澤より

等々力へ引移したるか、今しるべからず、又同古文書の中一通には醫王山満願寺ともあれば、後世致航山に更めしならん歟、猶可考のみ、

總門の額、致航山の三大字は、小篆にして、廣澤先生の筆、又本堂の向拜に掲て、満願寺と

書せしは、息男九臯の書なり。

大藏村年貢四十貫皆納 石井戸新開貳貫満願寺へ一貫分

夫々錢七百五十貫づつ 夫々二百五十隨濟者也



満願寺



芝村十一貫皆納

高田分二十貫皆納

坂戸河原十二貫皆納

熊澤分五貫皆納

弘治二年丙辰十二月十八日

吉良家印朱

世田谷之内滿願寺之事山屋敷同手作分之田相任爲參御達之處
寺家再興有之祈禱以下勤行可被修之者也委細松原佐渡守可申
分候恐々敬白

天文廿一年壬子二月大吉日

左兵衛 佐判
誓音 寺

世田谷之内深澤村滿願寺分於何年諸役公事一向不可有之爲後
日證狀如件



今井谷

天文二十三年甲寅卯月大吉日

前左兵衛佐頼康判

満願寺

就醫玉山満願寺再興可爲永代諸役不入者也。當家主子々孫々不可背此旨仍而爲後日證狀如件

甲寅二月吉日

前左兵衛佐頼康判

満願寺

此古文書満願寺および農家等に散在して全からずといへり。

廣澤先生之墓 同境内、堂より後の方、岳の上うへにあり。廣澤先生は細井氏、通稱を次郎太夫と呼べり、或は思

まなび、若冠にして柳澤侯に仕ふ。後致仕して城西青山に隱る、堂敷字樓、觀鷲百

正面 廣澤先生細井君之墓

左面 豪徳院不孤有鄰大居士

背面 諱知慎字公謹號廣澤姓藤原氏

細井父知治母山本氏

萬治元年戊戌十月乙亥八月壬申

生遠州懸川

右面 享保二十年乙卯十二月己丑二十

三日戊子卒于江戸城西于寢享年

七十八

孝子知文建

其餘先生の父母及び息男九息等、すべて細井一家の墾城とほぼしく、垣をめぐらしたる中に、ことごとく同姓の人の墓あり、孝子知文とは則ち九息の事をしさいへり。

赤坂御門 麴町の方より青山へ行く道、赤坂への出口なり。此御門は北斗形ほくしうがたとして、江戸御城の

御構へ多きが中にも、殊更勝たる繩張なりといふ。或人の説に、赤坂は昔山「アカネヤマ」の邊の坂なればかく云

役殿にも、江戸赤坂六ヶ村千葉殿所領すとあり、武蔵國

永川明神社 赤坂今井にあり。此所を世に三河臺といふ、天和の頃松

乘院と云ふ。祭神當國一宮に相同じ。赤坂の總鎮守にして、祭禮は隔年六月十五日、永田馬



場山王權現と隔年に修行す。

江戸名勝志、徳庵子等の草紙に、當社元一木村にありしを享保十五年己酉今の地に遷座、社を御造營ありと云々。

按ずるに、當社を古呂故宮とし、又享保中一木より今の地にうつし奉るよし諸書に見ゆれども詳ならず、寛文江戸圖に古呂故宮と稱するものは、今の一木に記して、氷川明神は同繪圖に今の地に記しあり、しかるときは各別の社なるべし。

江戸名所記に、天曆年間江州甲賀郡に連林と號けて天台四明の法灯をかまげ、一念三千の觀行を疑す抄門あり、東國遊化の頃、此所に一夜を明し、夢中に靈示を得て土中より十一面觀音の像を得し、こゝに安じて一木觀音と稱す。連林化寂の後治曆二年丙午開東大に早す、萬民當社に雨を祈りて驗あり、夫より後氷川明神と崇めまつるとあり。

古呂故天神社

同所一木の地、赤坂田町にあり。或は小六に作る。別當は洞家の禪宗にして

清徳寺と號す。

武藏國風土記殘編曰

荏原郡赤坂庄。小六天神。或古呂故。圭田三十五束三毛田。天武天皇三年甲戌十一月。始行神禮。有神戶巫戶。所祭大已貴與少彥名園韓神也。號小六者。以古呂故岡之名也。云云。

按ずるに、案の一本に、此大明神も常國八王子の邊に木呂子と云ふ所あり、其所の氷川明神を此所へうつす、道灌の書に木呂子の某など云ふ事ありと云々。又同書及び江戸名所話等の書に、慶長の頃、關東の小六とて美貌の聞えある馬追ありて此赤坂に住す、常に氷川明神を尊信し後其家富めり、依て社の破壊を再修す、故に後に小六の宮とあれども證となしがたし、江戸めぐりに、小六明神は日本武尊の垂跡なりとあり、請説紛々として詳ならず、姑く風土記の說を用ふべき歟、猶可考のみ。

信康山龍泉寺

同所一木町道より右側にあり。淨土宗にして、花洛知恩院に屬す。開山を

隨流和尚と號す。寛永十一年の開創たり。當寺佛元和尙は扶宗の志厚く、曾て子信録千卷

を著し、刊行して、普く學徒に示す。尾州の産なり。當寺に子安觀世音を安置す。聖觀音

にして、傳教大師の作なり。又同じ相殿に、藥師佛をも安ぜり。同作なりと云ふ。世に一木觀

音、一木藥師と號く。本尊は立像御丈三尺餘の彌陀如來、行基の作なり。脇士、觀音勢至の兩

像は、作者しれず。又境内天滿宮の宮ありて、稻荷を相殿とす。天滿神の神像は、東叡山慈

眼大師作らせらるゝ所なりと云傳ふ。

平河山淨土寺

源照院と號す。同所龍泉寺より、半町程南の方、同じ側にあり。淨土宗に

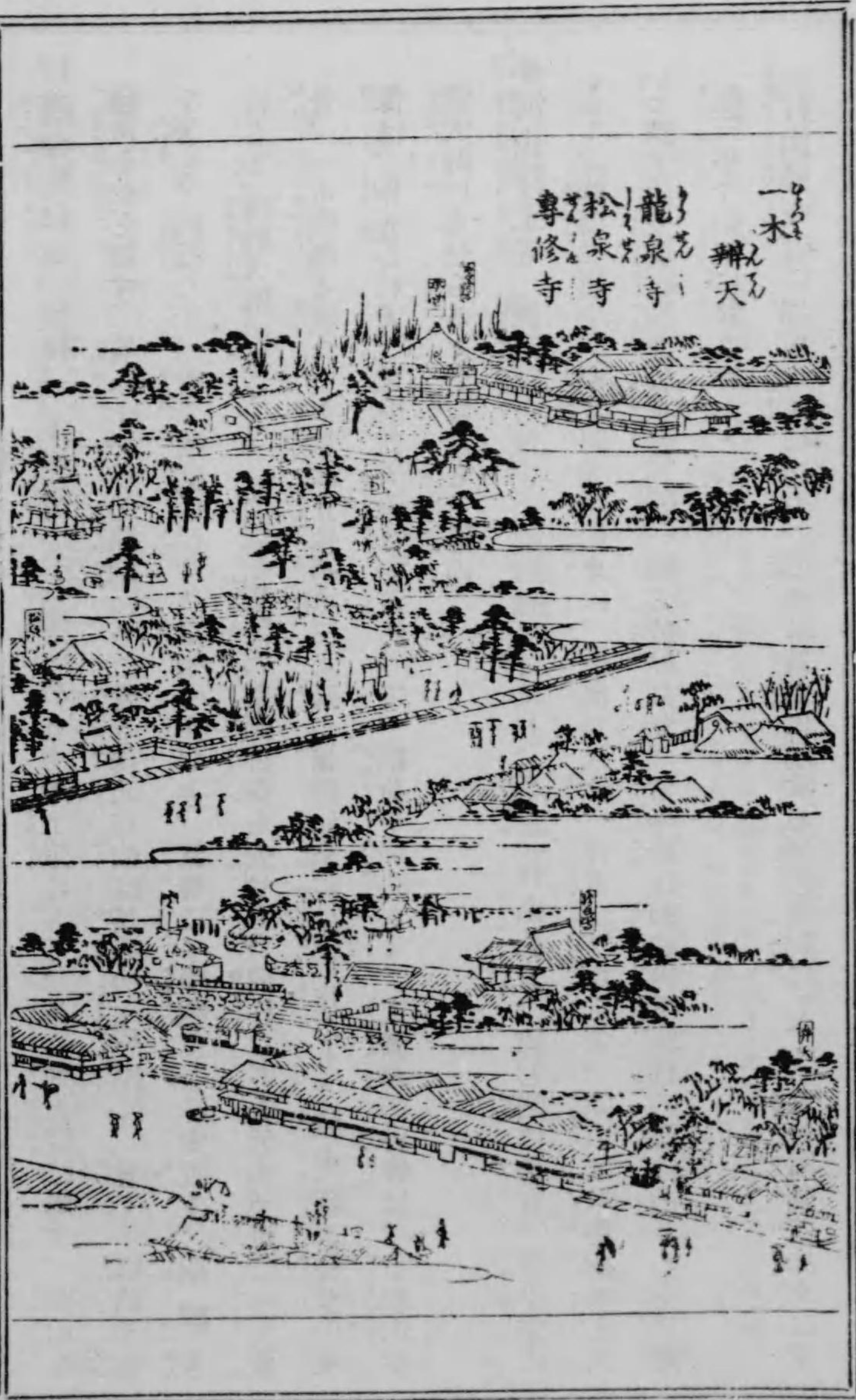
して、緣山に屬す。本尊阿彌陀如來は、坐像四尺餘、作者詳ならず。開山は教譽聖公上人

と號す。中興は源蓮社本譽利覺一故と號けたり。當寺昔は御城内平河口の邊にありしを、元

龜三年今の地に移されしと云ふ。

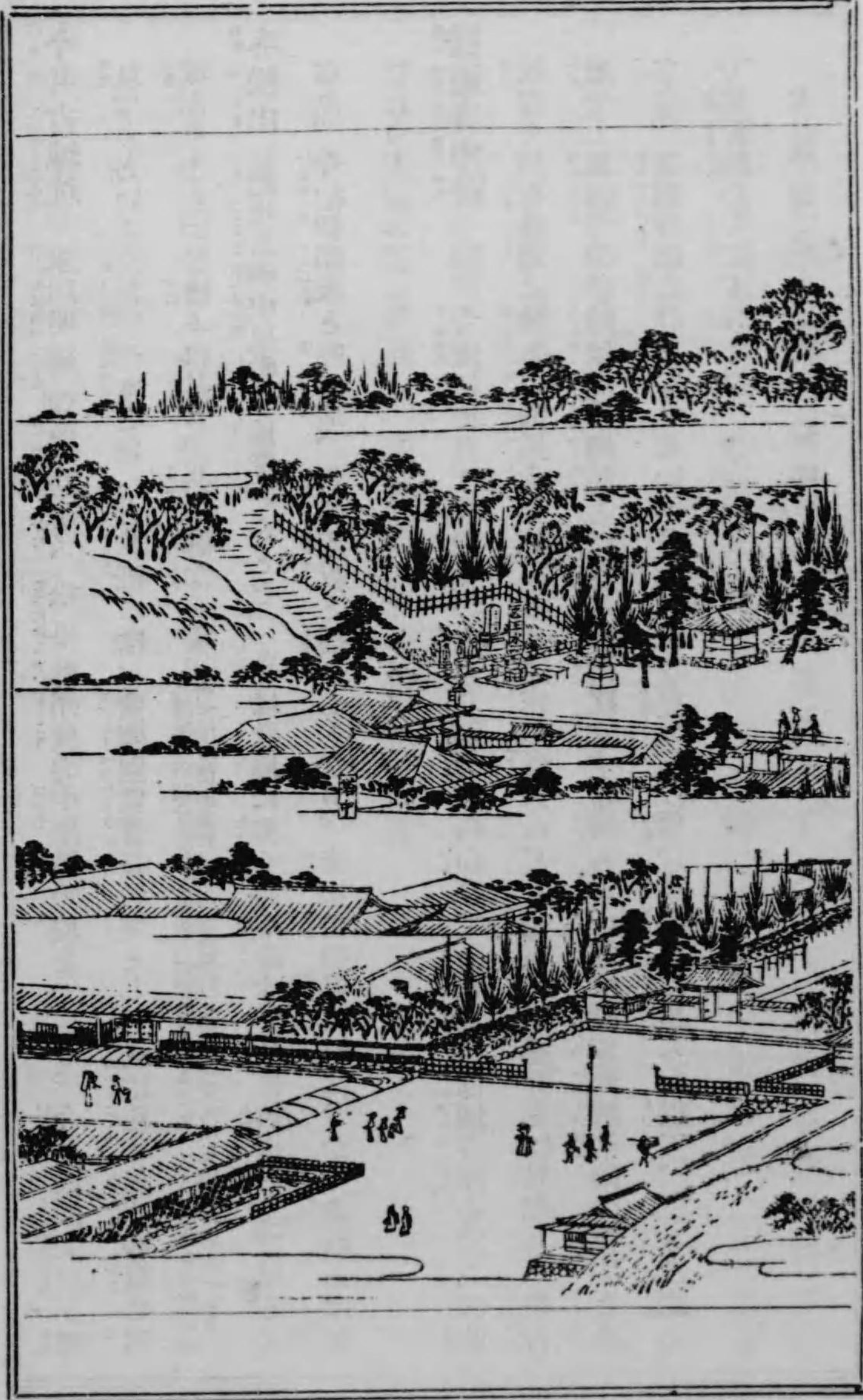
一行山專修寺

同所寺町にあり。當寺も緣山に屬する所の淨刹にして、本尊阿彌陀如來は惠

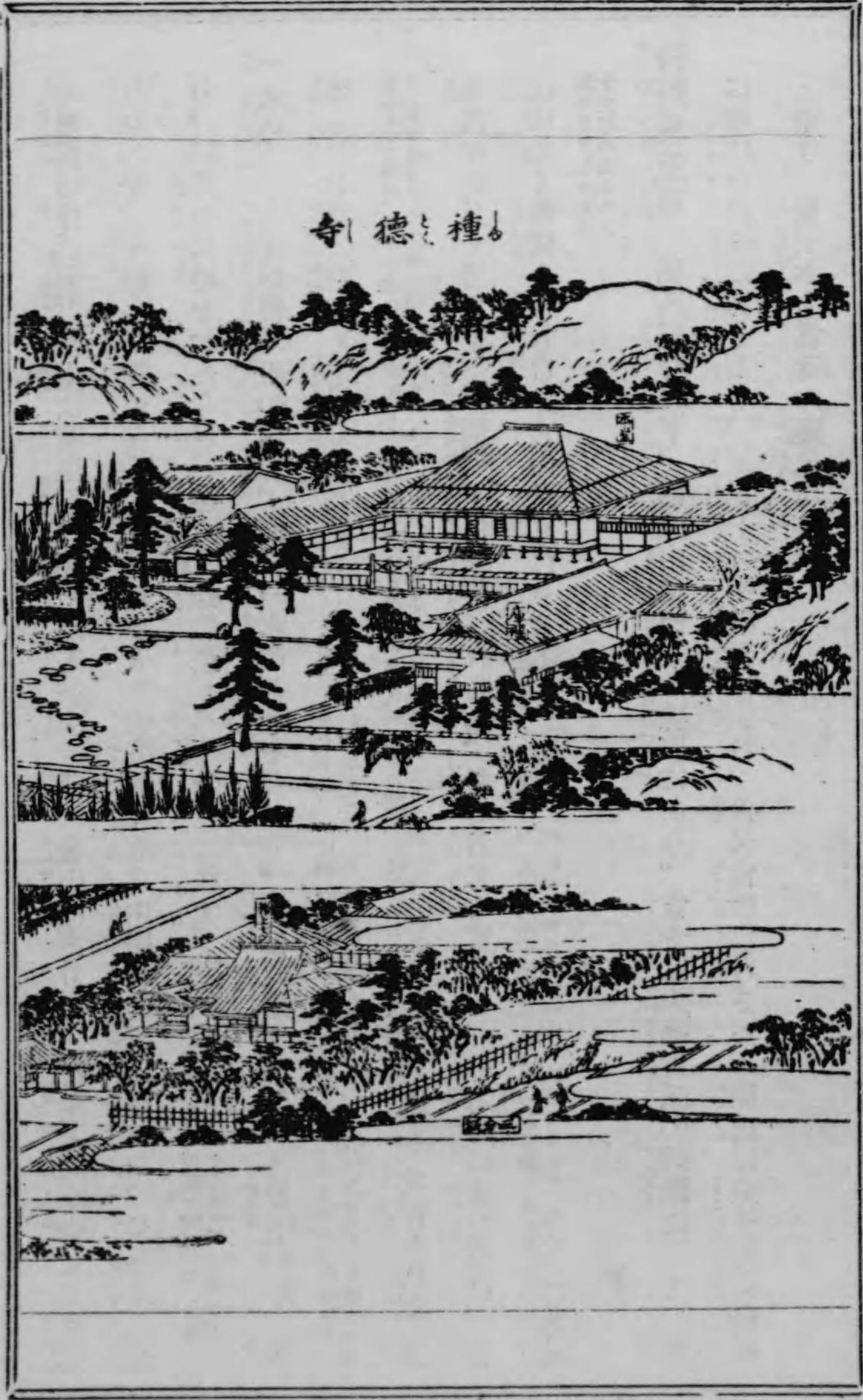


心僧都の作。丈三尺 開山は寂蓮社曇譽上人と號す。昔は青山にありて、勢至菩薩を安ぜし草堂なりしが、永祿年間開山上人一字の梵宇とし、其後赤坂氷川明神の邊に移るを、又寛永に至り、同寺町に地をかへられ、遂に元祿に至り、今の地に移す。往古より安置の勢至菩薩の靈像は、今猶一木原 今赤坂傳馬町の裏通、僅に一木町の名を残せり。昔は此邊なべて一木原といひ、矢盛莊 七郷の中にて、古き名なりと云ふ。中古より上下と二ツにわかつ、上一木は四谷岐ヶ橋の邊をいふ。今四谷くちを一本と云ふ。又下一木は此赤坂にして同所清岸寺にも藥師ありて、靈王寺の靈像と同伴にして共に一木藥師の稱あり。昔其境内に大木の榎あり是り。昔は此寺にも大木の榎ありしとぞ。そのかみ人次と書きしを彼の大樹によりて後一木と書き改めたると云ひ傳ふ。北條五代記、大永四年正月十三日、北條氏綱、上杉朝興に打勝ち、敵の首ども實檢し、一木原に簇打揚げ、作法の如く勝鬨を執行ひける由見えたり。北條家の所領役帳に、太田大膳亮所領の中に、一木原の地名を加へたり。屋になりしは天正十九年の頃なりと。

狩野興意墓 同所三分坂下、靈鳳山種徳寺の境内にあり。當寺は大徳寺派の禪園にして、昔は相州小田原にありしを、天正十九年麴町に引れ、後又當所に移さる。開山は東光知灯禪師と號す。醫王水も當寺の靈泉なり。



種子徳寺



今井古城址 氷川明神の西北の方、松平藝州侯の中屋敷の地をいへり。今井四郎兼平が城

址なりといふ。紫の一本といへる草紙には、齋藤別當實盛の城とし、或は田子先生義賢の出

城なりともいひ傳ふれども、共に詳ならず。北條家の所領後、太田新六郎義隆後などいへる人、此地を所領に加

赤根山 紀州公御中屋敷の地をいふとぞ。昔は此地に多く茜を産す。故に茜山とよびけると

なり。今紀伊國坂と呼ぶ地、昔は赤坂と稱へしとなり。赤根山の坂なれば、かく赤坂とは名

けたりと云ふ。

圓通寺舊跡 同所寺町にあり。此地申の方より寅の方へ向ひて下る坂を圓通寺坂と云ふも此

故なり。今此地に佛智山圓通寺といへる日蓮宗の寺あれども、古の圓通寺とは異なり。往古

廢せし圓通寺の洪鐘は、圓通坊といへる沙門建立する所とす。銘は深草元政法師の撰する所

なり。其鐘今は亡びてなしといへども、古を存せんが爲、草山集に出るを以て、こゝに記し

て其舊跡を失はざらしむ。

赤坂圓通寺鐘銘竝序

武州赤坂圓通寺。募鑄千斤銅鐘。備乎十二辰之候。按大集經。菩薩應
類悲願。化作十二時獸。在寶山中。修法緣慈。而爲一切精魅之主。制彼
撓亂。護持世界。圓通之舉。其意在茲。住持僧某。介於人乞銘於余。因以
十二獸辨之句。勒爲十二韻。贈焉。客曰。雖然。如其似遊戲。何。余曰。諸佛
菩薩。爲羣類示種々身。現種々土。設種々法。以至吹螺擊鼓。鳴鐘。悉是
莫不遊戲。故云。遊諸世間。如幻師。如兒戲。余亦竊學之人也。會作此銘。
又遊戲翰墨爲佛事。其爲似遊戲也亦宜。

銘曰。

鼠山流光人未驚	牛王出世振梵聲
虎狼野干氣縱橫	兎角方便誘群情
龍宮高處擊華鯨	蛇室睡破覺心生
馬腹忽變聖胎成	羊鹿牛車休復轟

猿啼霜降月色清 雞人未唱客先行
狗不夜吠王舍城 猪觸金山轉崢嶸

崑崙山玉窓寺 同所右側、青山家の邸第の間にあり。禪宗にして、開山は普光禪師、開基は青山氏忠俊の女玉窓秀珍大姉たり。故に寺號とす。本尊觀世音の像は、中將姫香を以て是を製する所といへり。青山は赤坂の西邊谷よりは北なり。此地もとより麻布の郷に屬せり。天正の後此地を青山因幡守忠俊に隔てて住居せられしなり、忠俊の寺は道より北にありて、玉窓寺といふ。則ち當寺是なり。又道より南にあるを幸成の寺とするは、梅窓院是なり。或人云ふ、此地は天正の頃山口重政の第宅なりしが、後空の高木主水正次に地を割て與へられしとなり、故ありて後この地を青山家に賜ふとへり。其地の廣かりしに上りいづしか青山と唱へ來れるなり。

百螺山鳳閣密寺眞言敎院 當寺は醍醐の院室にして、戒定慧院と號し、諸國呪驗末寺の總綱たり。本坊は和州吉野郡鳥栖山に在て、開基根本理源大師、諱を聖寶僧正と號す。光仁天皇の皇子葛聲王の令子なり。弘法大師の肉弟眞雅僧正に投じて剃度し、螢雪の功年を積み、南都の諸名公に參じて、法相三論、華嚴唯識を學び、慧業日々に進み給ひしかば、萬乘の聖主、一時の公卿、尊師の徳を仰慕し給ふこと淺からず。時に宇多天皇寛平元年己酉、尊師

年五十八、大和國金峯山に毒龍栖むことあり。霖雨洪水五穀登らず、山中修歴の徒もこれが爲に廢絶す。こゝに於て天皇宸襟を惱し給ひ、師に詔を下して、毒龍を降伏せしむ。師勅を奉り、金峯に分け入り、法威を震ふて龍を伏し、抖擻修行の道を再興し、次で奏聞を経、吉野郡に一寺を創建し給ふ。鳳閣寺是なり。即ち尊師の上足貞崇僧正を以て第一世とし、昌泰三年始て此處に於て、峯受灌頂の密法を興行し給ふ。爾來七百餘年を経て、元祿年中興俊尊僧都、寺號を東都に移して、一派總綱の役寺とし、神祖御由緒の地、遠州白山二諦坊康松院を兼領して、天下泰平國家利民の御祈願所とし、毎年の四月八日七月十九日には、順逆二峰の神事、柴燈護摩の儀式あり。此日諸人群參す。當寺本尊不動明王は、靈驗の尊像にして、里人出世不動尊と稱して、常に詣人あり。脇壇には神變菩薩理源大師の像を安置す。寺内に三峯權現稻荷の小祠あり。境内に櫻樹有り。暮春の頃清賞あり。此樹は當寺の一代俊賢僧都葛城山より種を取しめて、もと昌平坂の舊地に植ゑて、高間櫻と名づけたる名木なりしが、寛政年中聖堂御造營の節、替地を賜ひて、當寺を今の處に移されし刻、舊樹は枯



法泰平觀音堂



て、僅に蘇生の若木を存し、高間櫻の名を遺せり。當寺の西隣は、即ち梅窓院なり。

長青山梅窓院 寶樹寺と號す。青山久保町道より左側にあり。淨土宗にして、京師知恩院に

屬す。當寺は青山家累世 本尊阿彌陀如來の像は、聖德太子の作なり。當寺は寛永年間戴蓮社頂譽

冠中南龍和尚開基し、觀智國師を請じて開山祖にす。國師は後山中 惣門の額長青山の三大字は、

黄檗悅山の筆なり。

泰平觀世音 自然銅御丈三寸三分の千手大慈の靈像なり、天竺三佛と稱して不空三藏傳持し、善真大師天平十五年來朝の頃齋來し、聖武

に安置ありしが、故ありて青山家に傳はり、後又當寺に 羅漢堂 菩薩等の像を安置す、何れも願譽上人の作なり。 鯨 寶永七年

十一月當寺第八世法蓮社壽譽上人の時、舊鐘を鑄改んとせしに、或夜觀女夢中に告て云く、我今畜身を解脱せんが爲、一面の鐘を携へ來

り師願はくは是を加へ給ひてすまやかに佛果を得せしめ給へとなり、夢覺て後枕上正に一面の鐘を存せり、師是を奇とし其鐘をも加へ

て終に洪鐘成就す。依て其證として夢に見し所の觀女に寶 楔地藏尊 慈覺大師の作なりといふ。當寺九世願譽上人北總行徳の海濱

光祐龍大姉と法號をあたへられ鐘の面に其號を鑄ましむ 百濟稻荷 鎮座ありて永く衆生を度せんとなり、依て一社に奉ずと云ふ。 拾 櫻

當寺第二世峰譽上人門前にして、苗木をひるひ手親ら 虚空藏堂 明塔の奥にあり、本尊は坐像にして御丈二尺

載えられしとて、今堂前に存する所の垂枝標是なり。 青山海藏寺 同所一町ばかりを隔て、乾の横町右側にあり。黄檗派の禪宗にして、始は海

藏庵と號して、寛文十一年井伊侯夫人掃雲院殿の營建なり。其頃鐵眼禪師をして、此草庵に居

らしむ。竟に正徳三年に至り、公許を蒙り、一字の蘭若とす。 菊岡法涼云ふ、開 當寺より唐板の

一切經を出す。

熊野權現社 同所東南の方三町斗を隔て、原宿町にあり。祭る所南紀の熊野權現に同じく三

社なり。青山の鎮守にして、祭禮は隔年九月廿一日に修行す。別當は眞言宗にして、淨性院

と號す。

心見觀音 同北に隣る天台宗にして、竹園山教學院と號す。本尊は聖德太子の眞作といふ。

南命山善光寺 同所百人町右側にあり。信州善光寺本願上人の宿院にして、淨土宗尼寺なり。

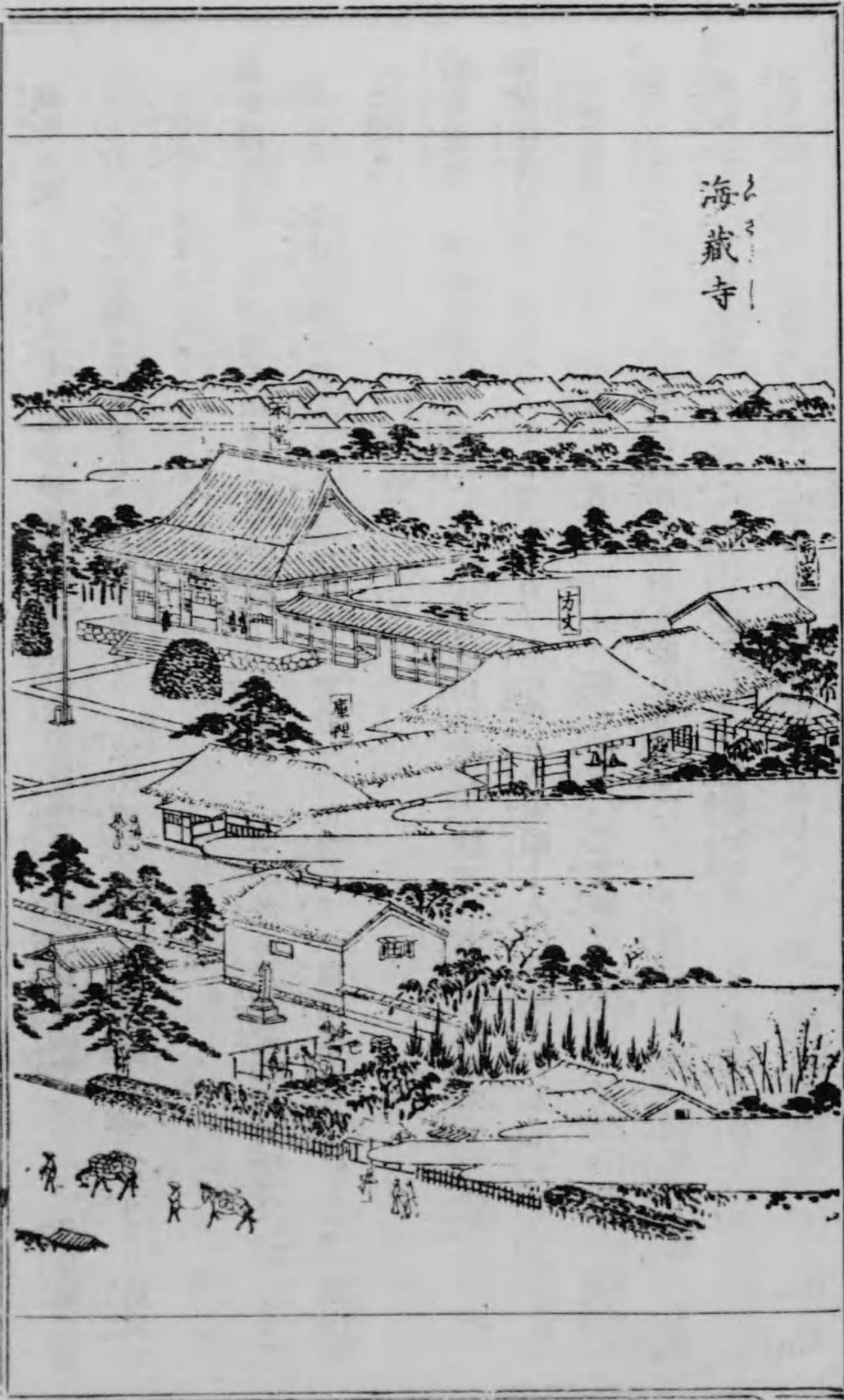
本尊阿彌陀如來は、御長一尺五寸、脇士、觀音勢至の二菩薩は、共に一尺づつあり。稱徳天

皇の景雲元年八月十五夜、法如尼和州當麻の紫雲庵にて、念佛誦持の頃、信州善光寺の如來

來現ありしを拜し奉り、直に一刀三禮にして、其御形を摸さる。是則ち當寺の本尊なり。

當寺は永祿元年戊午の創建にして、始は谷中にありしを、中興光蓮社心譽知善上人明 觀

海藏寺





熊野社





青山
善光寺



大和尚の時、寶永二年台命に依て、此地へ遷されけるとなり。今谷中に善光寺坂と號くるは、其舊地なるが故にして、其舊跡は、今の玉林寺の地なり

云ふ。什寶に中將姫、自の毛髪を以て製造する所の、六字の名號あり。

觀音堂 本堂の左に並ぶ、堂内觀音百體を安ず、本尊は聖觀音にして其丈二尺ばかりあり、惠心僧都の作なり。當寺わかし谷中にありし頃火災にかかりし時、自ら火中を通れ出給ひし靈像なりといへり。故にあざなして火除とも、又は火災の時櫻に飛びうつり給ひしにより櫻觀世音とも稱するといへり。

斥候塚 一名を去我苦塚ともいふとなり。百人町の通り田村下總侯邸の中にあり。相傳ふ、

澁谷の金王磨斥候の塚なりと。此塚に登りて四方を顧望すれば、二三里が間は手にとりつべく、遠くは富士、筑波、信、甲、相、武の青嶽、房、總の翠巒畫くが如く、憂悲苦惱を去る、依て號とすといふ。或人云ふ、此ものみ塚のたぐひ府中武蔵野のあたり、こゝかしこにあり、古へ府中野火留のあたり迄一向「ヒタスマ」の原野にて、行くとも秋の果もなく月の入るべき山の端さへなき、名にしも大原なれば、旅人の道に迷はざらん爲に、所々にかゝる塚を築き置て、其上より望めば道筋ことごとくわかる様になへしものならんといへり。又府中の北に富士見塚、或は佛の位、八國山などいふたぐひ、四五箇所迄存せり。この所にあるも又其たぐひなるべし。又或人云ふ、去我苦塚と云ふは、申樂塚の誤なるべし、昔此所にて申樂興行ありし舊跡なる故に此名あり、斥候塚も又見物の人の登り居たる故に、物見塚と唱へしなるべしと云々。未その是非をしらず、昔の鎌倉海道の舊跡此塚の下に傳残りてあり。

筈橋 青山長者丸の谷間の小溝に架せり。里俗云ふ昔は此川を龍川といひて大河なりしと云ふ。或は鶉ヶ谷に作り、鉤匙とす。

菊岡沾涼云く、往古六孫王經基佩刀の筈を、此地の開守に與へられしに由りて名づく、故に筈橋といひ、又は經基橋とも號けるといへども、應説なるべし、筈は和名抄加美左之「カミサシ」と訓ず、髮搔として可ならん。其餘髮搔に因む所の諸説は繁きを厭ひてこゝに漏しつ。

按ずるに、筈橋は國府が谷橋(コフガヤバシ)なるべし。世に長祿年間の江戸の舊圖と稱するものに、青山の邊に國府方といへる地名あり。永祿二年北條家の所領役帳にも、森彌三郎といへる人の、江戸の所領の内、國府方といへる名を注し加へたり。是等を合せ考ふるに、此所は昔國府方と稱せし地にして、其谷合に架せし橋なれば、國府が谷橋と唱へしなるべし。やといは通音なり。俗間市谷越谷、旭谷、などいふにひとしく、やをいに唱へかへたりしより、後人髮搔(カウガイ)にちなみてさまじの應説をば爲せしとあはえたり。

澁谷長者墳墓 同所松前家の第宅の地にあり。小高き塚にして、頂に松樹繁茂す。相傳ふ、

應安の頃迄此地に富農ありて、是を澁谷長者と稱せしとなり。今同所百人町の南を、長者が丸と唱ふるも、其宅地の舊跡なればさはいふとぞ。其長者

が子孫近き頃までかすかなる百姓にてありしとなり。

按ずるに、江戸砂子に、澁谷百姓町岡部家の別荘の地は、そのかみ富民慶福といひし者の宅地なりとあり。又青山恩田の松平藤州侯の別荘に稻荷の遺祠ありて、其前に古き石の燈籠あり。其棟石に、康曆二年十月日願主四郎太夫とあり、是を澁谷長者建立のものとする、然らば四郎太夫慶福など稱せしにや。されど其姓氏等も知るべからず、江戸砂子には澁谷長者の名は宗順といひけるとあり。

通明觀 澁谷岡部家別荘の號なり。風景他に越え、四時共に美觀たり。土民の云ふ、此地は

往古澁谷重國舊館の跡とも、又は富民慶福といひしものよ住し跡なりともいへり。

普陀山長谷寺 同所にあり。曹洞派の禪窟にして、江戸檀林の一室なり。野州富田の大中寺

に屬す。本尊十一面觀音の像は、和州長谷寺の觀音の模形にして、立像二丈六尺あり。御首の中に御丈四寸の十一面觀音の靈像を安置す。則ち和州長谷寺の本尊と同木の樟にして、同

井橋



作なりといへり。開山は門庵宗關和尚たり。當寺昔は赤坂溜池の上にて、龍雲院といひ

しを、天正十二年甲申此地に移し、寺號をも改むるといへり。或人云ふ、當寺昔は山口氏重政の開基にして、青山の屋敷の中に建立し、母堂龍雲院

の號を寺號とし、山口家の香花院たりしとなり。されど其後故ありて離檀ありし由、其家の記録にみゆるといへり。

古佛倉 本堂の右にあり、希世の靈佛靈神の像を安じて庫中に充滿せり、此地の住人鶴見内蔵助秀治といふ人當寺へ納むる所にして、すべて百四十一卧ありと云ふ。世に澁谷長者といふは是なりとぞ。

當寺境内は古杉老松蒼鬱として、常に寂々寥々たれば、座禪公案の爲に便あしからず、佛目

祖風をあふぐには、勤てよろしかるべくなん。

氷川明神社 澁谷川の端にあり。相傳ふ、右大將賴朝卿の勸請なりと。則ち此地の産土神

にして、祭禮は九月廿九日なり。此日社前にて角力を興行す。別當は天台宗にして、惠日山

藥王院寶泉寺と號す。慈覺大師の開基、本尊は藥師如來也。作者詳な

澁谷川寺前を流る。此北の端に、源秀山室泉寺といへる眞言律の寺院あり。閑寂玄隱の地な

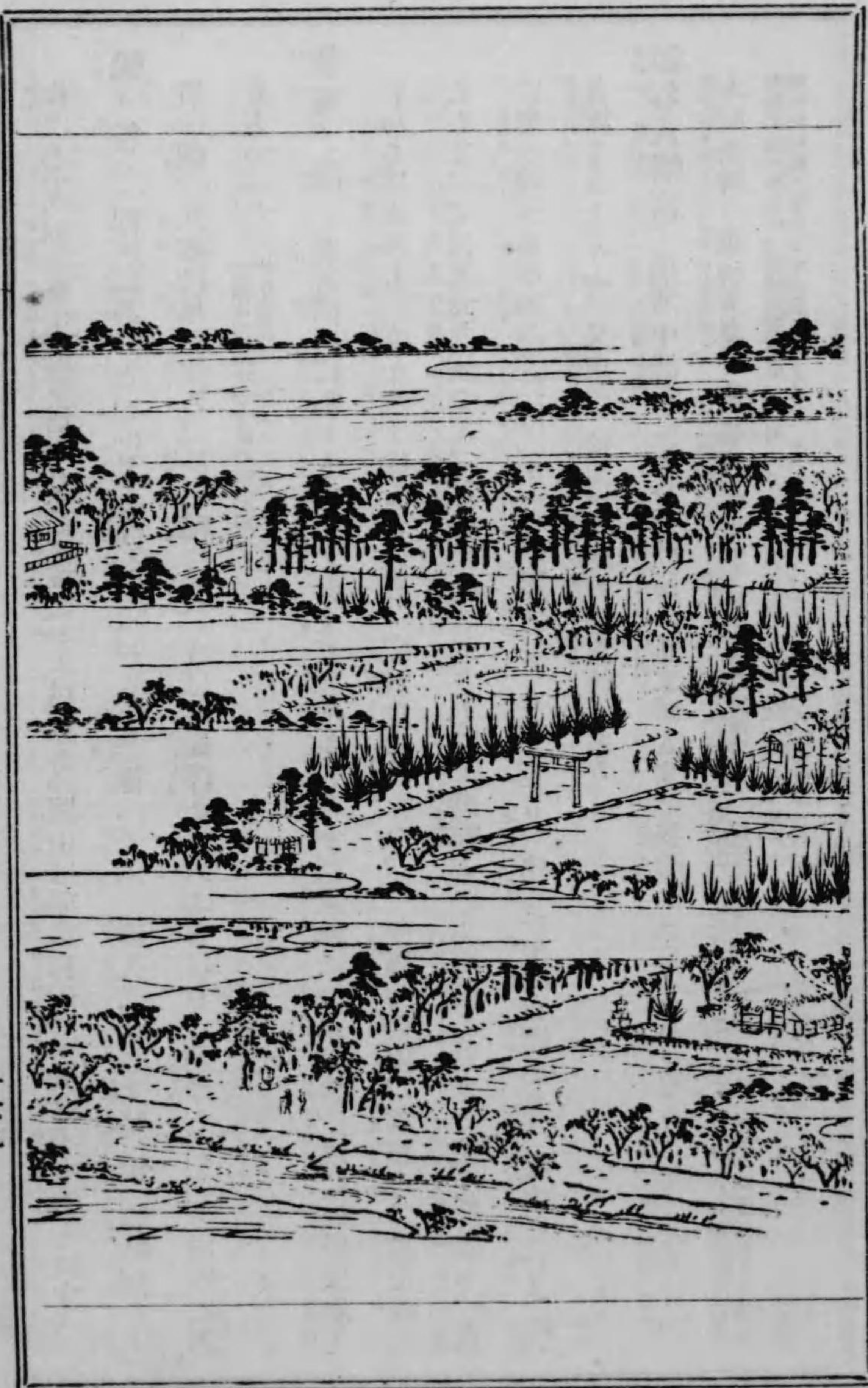
り。近頃法如比丘も。ここに住せらる。

金王鷹守佛正觀世音 上澁谷慈雲山長泉寺といへる禪院に安置す。本尊觀世音は、運慶の



寺谷長谷波去





浪谷
氷川明神社

作にして、則ち金王磨尊信ありし靈像なりといへり。開山は瑞翁和尚、中興は不中の號す。

鶴ヶ谷 同所にありといへども今しるべからず。傳へ云ふ、建久二年右大將頼朝卿飼るよ

所の鶴、此地に巢を作る、故に鶴ヶ谷、或は又鶴澤とも云ふとなり。羽澤といふも同所にあ

りといへり。羽澤に花洛妙心寺派の神宗普

朝霧ヶ瀧 是も同所にありといへども未だ其地をしらず。里諺にいふ、昔此地に澁谷宗順と

いへる富民あり、女を撫子姫とよべり、容貌衆に勝たり、一年彌生の頃、圓證寺の櫻を看ん

として、父母其女を誘引て、彼寺に往きたりしに、朝霧といふ可髪ありて、姫を戀慕し、竟

に思を遂ざるを恨み、此瀧の下に身を沈たりといふ。其傍に小高き岡あり。願山といふは、

其塚なりと云ふ。又東の傍に圓證寺の舊跡もあり。

澁谷八幡宮 同所中澁谷にあり。此所の産土神とす。祭禮は八月十五日なり。

本社祭神 應神天皇一座 社記に云く、此神像は上古弘法大師聖前國字佐八幡宮のつげあるに上り、しばらく山城國鞍馬寺に

慈覺大師の作なり。圓證阿闍梨東福寺創

矢拾觀世音 社前にあり。本尊は慈覺大師の作にして金王磨尊信の靈像なりといへり。社傳に、保元年間の戦に此本尊

如來 同所にあり。龍宮出現の尊像なりとぞ。義朝誕生の時龍宮より出現し、又頼朝尾張國輪屋(ハタヤ)にあり

金王櫻 一名憂忌櫻ともなづけたりとぞ。傳へ云ふ、往古久壽の頃源義朝鎌倉谷の館に植るもかれしを、金王九に賜ふの後、

社内をりける元木の櫻、既に枯たりしかば、御家臣澁谷善人といふ人は金王九の遺裔なれば、他の人の植たりしより、祖先への孝養

座の松 境内本社の前左の方にあり。大永四年五月十三日北條氏綱と上杉朝興、高輪の原にて合戦の時、氏綱の後陣大進寺八郎兵衛小

座の松をまはりて、澁谷へ攻入り放火す、其餘煙當社を覆ふ、此時神體此松樹の上に遷りとなり給ふ、故に此名ありとぞ。むか

今は僅に古松五六株社地の邊に存せり。

什寶 月輪御旗一流 社記に云く、後一條帝の長元元年五月、平忠常北總に兵亂を起し近國を掠む、源頼朝臣忠常追討の

八幡宮とあがむ、其後河崎土佐守基家に、白旗一流賜はり、仰り仙北金澤城を攻め落せり、依て義家朝臣基家を召され此軍勝利ありしは全く

此御旗をみだりに拜する者ある時は、かまらず祟ありといふをもつて、能證阿闍梨深く社う

免建觀世音 社記に云ふ、源義家公陣中奉持の靈佛にして、後年基家

獅子丸太刀 河崎土佐守仙北金澤にして猛威を振ひ、城を攻破



金王八幡社



毒蛇長刀 金王丸長田ヲサグが館野間の内海ウツミにて勢

六孫王經基髮搔 經基より權守興世に賜ふを、義家朝臣當社

社記に曰く、當社は高望王より五代の後裔、村岡五郎良文か曾孫、秩父別當武基の二子に、同十

郎武綱といへる英雄あり。寛治三年六月清原武衡、同家衡が猛威を摧き、奥羽の間に勢を揮

ひ、名譽を天下に輝かしぬ。故に將軍義家朝臣是を感じ、勸賞として、其子六郎基家 河崎土

云由社記 に、武藏國谷盛莊を賜ふ。赤坂に々々木麻布、飯倉一ツ木、今井等はなりと云ふ。依て基家勝地を

擇び、同六年正月、始て采邑の地に當社を營建し、金王鷹迄、代々氏神と稱し、尊重嚴な

りけるとぞ。別當は天台宗にして、澁谷山東福寺と號す。相傳ふ、六孫王經基の開創にして、

昔は親王院と呼びしとなり。開山は圓鎮僧正と號す。養和元年、百十一歳にして化寂ありし

と云々。

金王鷹影堂 同所向側、叢林の中にあり。八幡宮社記にはく、金王鷹十七歳の時、主君義

朝の命により、鎌倉に赴く頃、其母別を惜み、悲歎の涙に沈む。依て金王鷹自ら姿を造り



て、母堂の許に残しとどめけると云云。其像は鐵衣(ヨロヒ)二刀を帶するかたちなり。

按ずるに、金王磨祖先是高望王より五代の後裔、村岡五郎良文が曾孫、秩父別當武基の子、同十郎武綱、其子を六郎基家といへり。此時に至り始めて遊谷を以て氏とす。同く一子重家河崎平三太夫のち從五位下に任じ土佐守と云ふ嗣なきをうれへ。當社八幡宮に祈請し奉り、永治元年一子を得たり。八月十五日に生る。金剛夜叉明王の化身なるよし靈示あるを以て、上下の文字を借用ひて金王磨とは名づけたりとぞ。一説に金王磨は庄司重國の子なりといへども時代違へるに似たり。保元物語を以て考ふるに、金王磨は左馬頭源義朝に仕へし童にして、度々てがちをあらけし頗る大功の者なり。義朝平治元年に大納言藤原信賴にくみしてむはんを起し、侍賢門の軍に打負け、尾張國野間の内海にありし御家人長田庄司忠宗がもとに落ちのびたまひしを、長田心がはりして浴室に義朝を弑し奉る。金王磨くちをしく思ひ、走り廻りむかふ者共をきりふせて、其後都に登り義朝の妾常盤がもとに参り、其ありさまをかたりて後義朝の跡をとぶらひまめせんが爲出家して諸國を修行し、其終る所をしらずとなり。金王丸より遊谷と唱ふるも、縁起には重家實治六年遊谷の姓を賜はると見ゆれども違へり。系圖を見るに、重家の子重國、其子高重、其子金王丸とあり。社記には重家一子なきをうれへ、八幡宮へ祈り授る所金王丸といふ。高重は金王丸より後にして文治年中頼朝時代の人なりと云ふこと違へり。

金王磨産湯水 同所一町ばかり西の方、堀の内といふにあり。誕生池とも號く。八幡宮の社記に、一度此靈泉に觸るよ者は、齡千歳を保つと云傳ふとあり。此邊すべて遊谷氏居館の地にして、土人城跡と稱す。馬場の形、築地の跡など存せり。古井こよかしこにあり。

東 鑑

治承四年庚子八月二十六日。入夜定綱盛綱高綱等。出宮根深山之處。行逢醍醐禪師全成相伴之。到于重國遊谷之館。重國乍喜憚。世上



金王磨
産湯水

之聽招于庫倉之内。密々羞膳勸。下略。

同書

養和元年八月二十七日。澁谷庄司重國次男高重。竭無貳忠節之上。依令感心。操之隱便。給知行澁谷下郷。所濟乃貢等所被免除也。云云。河崎庄司次郎高重宅舊趾。同堀の内にあり。土俗傳へ云ふ、此重國は違論の事ありて、六郷の河崎へ引移れり。其頃此地にありし山王の社をも、彼地へ引たりとて、其舊地に稻荷の叢祠を残し留めたり。

姊尾平次左衛門光景舊館地。是も同所にあり。今も光景が馬を冷したりといへる小池あり。早魃にも潤る事なく、霖雨にも溢る事なし。常に岩間をもち出て、清冷たり。傍に駒繫榎と稱するあり。光景が愛せし安達栗毛といひし駿足を繋ぎて、水を飼ひしとなり。甘露水。同所にあり。里俗傳へ云ふ、天慶年間、六孫王經基朝臣此地に旅宿ありし頃、此水を捧ぐ、味美にして甘露の如くなり、裏詞ありしより名とせりとぞ。

玉池 同所にあり。里人云く、天文の頃、天下大に旱魃し、河水は流を絶し、池沼は平地に

異ならず、時に此水涌出する事常に倍せり。此里に住る一女子水を掬んとして、水器の中に手鞠の如き一顆の寶珠を得たり。玉精其女子に託して云く、是はこれ八幡宮の神器なり、大永の兵火をさけて此井中にあり、直に神祠に收むべしとなり。依て里民大に恐れ謹て、是を神祠に收むるとぞ。此寶珠今澁谷八幡宮に收むると云ふ。此故に玉の井とも唱へたりしといへり。

神仙水 八幡の西にあり。相傳ふ、往古空鉢仙人此谷に入て、不老長生の仙丹を煉たりし靈泉なり。故に神仙谷とも云ふとなり。鉢山といふは法道仙人の鉢、此所に自ら飛來る故に號とすとなり。

富士見坂 澁谷宮益町より、西へ向ひて下る坂を云ふ。斜に芙蓉の峯に對ふ故に名とす。相模街道の立場にして茶店酒亭あり。麓の小川に架せる橋をも、富士見橋と名づけたり。相模街道の數四十八ありとなり、此富士見坂は其はじめなりといへり。道の中

道玄坂 富士見坂の下、耕地を隔てよ向ふの方、西へ登る坂をいふ。此坂を登りて三町程行けば鞍馬路あり直路は大山道にして、三間茶屋より



雷士見坂一名木松



豊戸(アボリト)の渡、又二子の渡へ通ず。右へ行ひ、世田ヶ谷へ行く道なり。道玄或は道りに作る里諺に云ふ、大和田氏道は駒場の御用屋敷の前通り北澤淡島への道也。 世田ヶ谷へ行く道なり。道玄或は道りに作る里諺に云ふ、大和田氏道 女は和田義盛の一族なり。建曆三年五月、和田の一族滅亡す。其殘黨此所の窟中に隠れ住て、 山賊を業とす。故に道玄坂といふとなり。

東鑑二十一云

建曆三年癸酉五月二日壬寅、和田左衛門尉義盛、率伴黨忽襲將軍幕下。謂件與力衆者、嫡男和田新左衛門尉常盛、同子息新兵衛尉朝盛、入道三男朝夷名三郎義秀、四男和田四郎左衛門尉義直、五男同五郎兵衛尉義重、六男同六郎兵衛尉義信、七男同七郎秀盛。此外土屋大學助義清、古郡左衛門尉保忠、澁谷次郎高重、横山權守時重守 中山四郎重政、同太郎行重、土肥先次郎左衛門尉惟平、岡崎左衛門尉實忠、田實忠與一義忠ガ子 梶原六郎朝景、同次郎景衡、同三郎景盛、同七郎景氏、大庭小次郎景兼、深澤三郎景家、大方五郎政直、同太郎遠政、鹽屋三郎惟守。以

下中略、和田四郎左衛門尉義直、七年卅 爲伊具馬太郎盛重被討取。父義盛、年十六 殊歎息。於今者勵合戰無益。云云。揚聲悲哭。迷惑東西。遂被討于江戸左衛門尉能範所從。云云。同男五郎兵衛尉義重、年三十四 六郎兵衛尉義信、年廿八 七郎秀盛、年五十 以下張本七人共伏誅。朝夷名三郎義秀、年三十 竝數率等出海濱。棹船赴安房國。其勢五百騎。船六艘。云云。又新左衛門尉常盛、年四十 山内先次郎左衛門尉、岡崎餘一左衛門尉、横山馬允、古郡左衛門尉、和田新兵衛入道。以上大將軍六人。遁戰場。逐電云云。

按ずるに、大和田は大多和なるべき歟。三浦一族の中に大多和と號するあり。東鑑に、治承四年八月廿二日三浦次郎義澄、同十郎義直、大多和三郎義久、子息義成、和田太郎義盛、同次郎義茂中略、三浦を出て參向すとあり。或人云ふ、道玄は沙門にして、此地に昔一字の寺院ありて道玄寺と稱したり、故に坂の名に呼び來れるともいひて、一ならず。

道玄物見松 道玄坂を登りて、七町あまり西の方、同じ街道大坂と云ふより此方右側にありしが、明和の頃枯たりしかば伐たりと云ふ。木の圍五かこみ程ありて、根より三丈ばかり上にて、東西へ廿間斗南北へ十六七間斗に枝ながれ蒼々たりしにより、炎暑の頃は行人此樹下



野・場・駒



に上りていこひたりとなり。今駒場坂の下用水堀の傍に一株の古の里諺に云ふ、道立此松樹に登り、往來の人を見下し、小賊に命じて、衣服物の具を奪ひ取しめたりしとなり。

駒場野 道立坂より乾の方十四五町斗を隔たり。代々木野に續きたる廣原にして、上目黒村に屬す。雲雀、鶉、野雉、兎の類多く、御遊獵の地なり。

鐘鐺塚 駒場野の中にありと云ふ。方九尺斗高さ七八尺斗なりとぞ。わかし此所にて梵鐘を鑄たる舊跡なりと云ひ傳ふれども、何れの寺の鐘にや知るべからず。富士見坂の下の水流。下瀬谷分水掛口の地の名に道場ヶ淵と云ふあり、いづれ此近邊に盛大の寺院ありしな

去我苦塚 別所臺と云ふ地にあり。塚の高さ一丈あまりあり。相傳ふ、昔澁谷長者某、此邊の人民を語り、時として此塚の邊にて酒宴を催し歡樂せしにより、苦を去の所謂なりと云ふ。

土器塚 駒場野の内なり。里諺に云ふ、往古此地奥州街道なりしにより、源義家朝臣奥州征伐の頃此地に至り給ひ、酒宴ありし土器を、後土人等此地に埋て、義家朝臣の武功英名を尊ぶのあまり、土器塚と稱すと云ふ。其塚の側を同勢山と呼ぶは、義家朝臣供奉の輩の居たりし舊跡といふ。

足毛塚 宿山と小地名に稱ふる地の里正、金子氏構の内にあり。頼朝卿乗する所の蘆毛馬の斃たるを埋藏せし舊跡と云ふ。

氷川明神祠 駒場野官林より此方の岡にあり。祭神素盞鳴命一座、天正年間甲州郡内上の原といへる地にありしを、加藤氏加藤氏の事は先の駒場野の條下にあり。此地に移り住する頃、産土神なるゆゑに、ここに此神を勧請なし奉るといへり。祭禮は毎歲九月二十九日に執行せり。

天満宮 同所駒場野道立坂より一町半斗東の方にあり。相傳ふ、往古此地の農民市兵衛といふもの地を穿ちて小き壺の中より、印子の菅神の像を感得せりといふ。

に宮居を營みて、鎮守に崇むると云ふ。昔の菅神の像は賤の爲に奪はれたりとて、今一尺斗に石を以て造れる菅神の

す、其松は宮居より半町斗西の方にして今中川候の山屋敷の中に入ると云ふ。

北澤
栗島社
池尻
祖師堂



石劔いさぎ 同社地稻荷の小祠に收む、長二尺二寸斗圍もにて八九寸廻りあり。往古昔神の靈像を感得せし時、同じ土中より得たりといへり。

北澤淡島明神社

北澤村八幡山森巖寺といへる、淨土宗の寺院に勧請す。

當寺は此地八幡宮の別當たり、故に八幡山の號あり。

又森巖寺淨光院と稱するは、越州黃門秀康卿の法説を採て寺の號とす。清譽上人其師萬世上人の遺命を奉じ、慶長十二年丁未四月當寺を開創し惠心僧都の作の坐像一尺五寸の阿彌陀如來を本尊とす、脇士觀音勢至の兩像は、行基大士の作と云ふ。此邊西瓜を産す上品とす。世田ヶ谷大丸の邊同じ西と稱せり。

祭神は紀州名草郡加太の淡島明神に同じ。相傳ふ、當寺開山清譽上人、紀州名草郡の産なり、しゆせやう成就の後、當寺を開創せらるゝといへども、常に腰痛の患あり、依て年月淡島明神に祈願を籠奉り、夢中靈示あるを以て灸治し、終に積年の病痾を遁れたりしかば、其報賽として、紀州加田淡島明神の神主に告て、此御神を此地に勧請なし奉り、法樂ありしと云ふ。此故に累世の住僧、連綿として此灸治の法を口授相傳し、衆病悉除の爲毎月三八の日は是を施せり。依て灸治を求めんとする輩、遠きを厭はずして、此地に至る者少からず。祭禮は三月十九日と云ふ。

除劍難日蓮大士堂

同所八町斗南の方、池尻村二子街道の右側、常光院といふ日蓮宗の寺に安置す。

此寺は日義上人の開基にして、往古は碑文谷法華寺の南坊なりと云ふ。日蓮大士の木像は、丈二寸二歩あり。相傳ふ、文永八年

天璣之部 卷之三

子明神



辛未九月十二日、相州龍口に於て、大士誅に伏せんとせられし時、刃段々壞の奇瑞あるを以て、終に北條時頼の赦免により、誅を遁れて同國依智に移り、本間六郎左衛門重連が家に入り給ふ。重連大士の化を尊み、大士時刻の自像を賜はらん事を乞ふ。依て自らの像を彫造ありて、重連に附屬せられたりしを、後故ありて當寺に安置するといへり。靈驗照々たるが故に、詣人常に絶えず。

正一位子明神社 二子街道下馬牽澤邑道より左の方、耕田を隔て丘の上にある。別當は天台宗宿山村壽福寺より兼帶す。

馬牽澤舊跡 同所子明神の前、今田畑となれる地の舊名なりといへども、今は上目黒世田ヶ

谷へ跨り、都て上中下と三に分れたる邑名となれり。里諺に云ふ、文治年間頼朝卿奥州征伐の時、澁谷八幡宮へ參籠あり。其時荏原野より、東條蘆毛の馬を選んで獻せられんとし、此地を牽れたりしに、躓たるにより是を止られしと云ふ。

或は云ふ、頼朝卿御符の時この所に於て乗給ふ所馬、頗る驚き諺に云ふ、恐れつゝしめりと云ふ。其事は足毛塚の條下を照し合せてみるべし。又云ふ、頼朝卿の乗給ひしは蘆毛なりしとて、今も此地にては蘆毛馬を著はずとなり。もしあやまつてこれを著ふ事あるときは必ず祟ありとて、恐れつゝしめりと云ふ。

若宮八幡宮 上馬牽澤村二子街道より右の方、三町斗入りて小き森の中にあり。駒留八幡宮と稱す。北條相模守時頼朝臣崇尊の靈像にして、神體は一寸五分斗ありて、左の御手に弓を

持し給へり。像の背に木牌を建る。其牌面に銘する文左の如し。

最明寺時頼公守本尊

經塚 駒留八幡宮

北條左近太郎入道成願

奉安鎮所徳治三戊申年十月廿三日

經筒 紫銅にして、合せ目をば紙にて留めたるものとほしく見ゆれど、朽ち損して紙の跡のみ存せり。かこみ五寸六分、長五寸あり。

敬白

八幡大菩薩御寶前

奉如法書寫六部妙法蓮華經

奉讀誦妙法蓮華經一千部